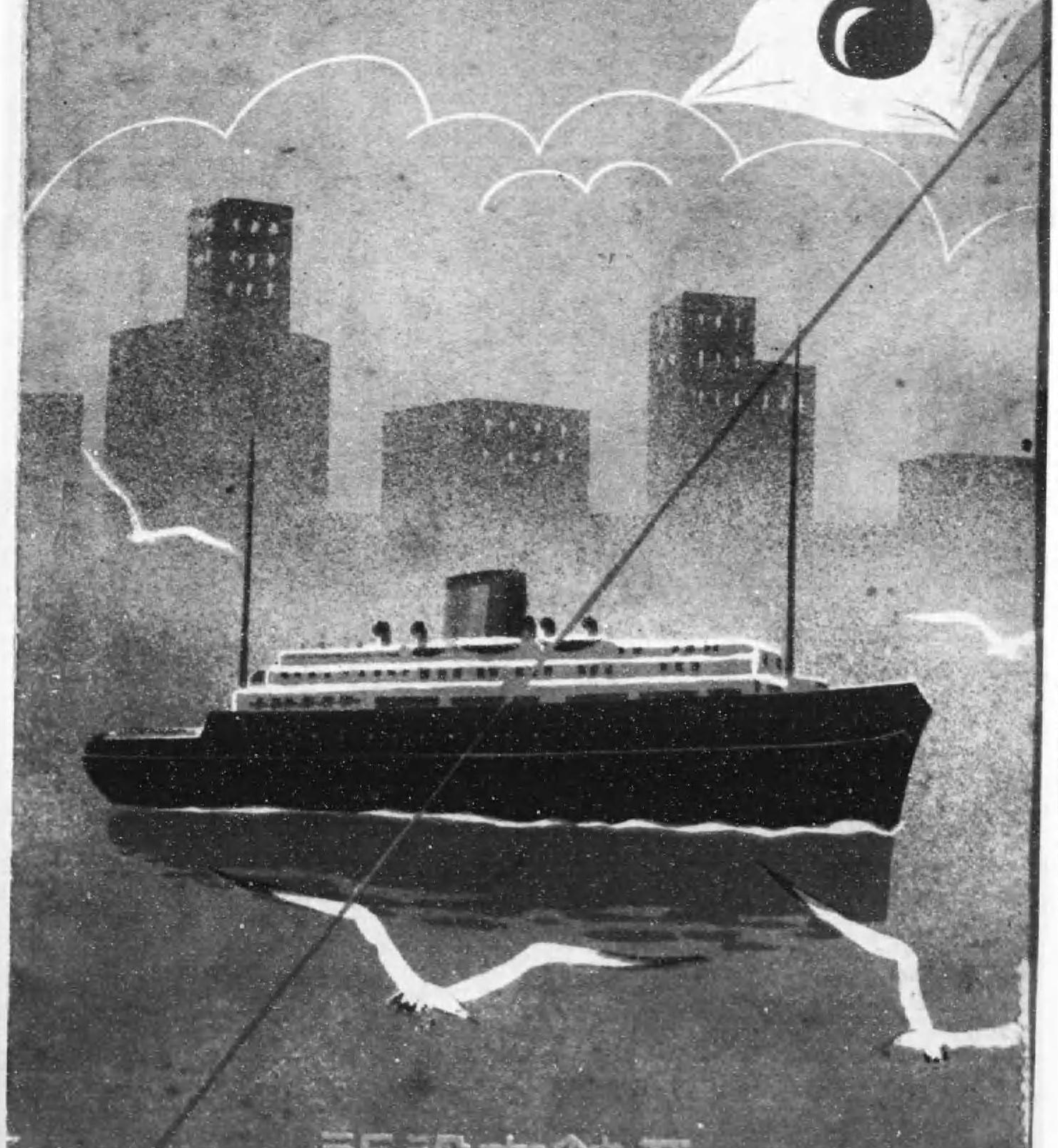
昭和十四年發行



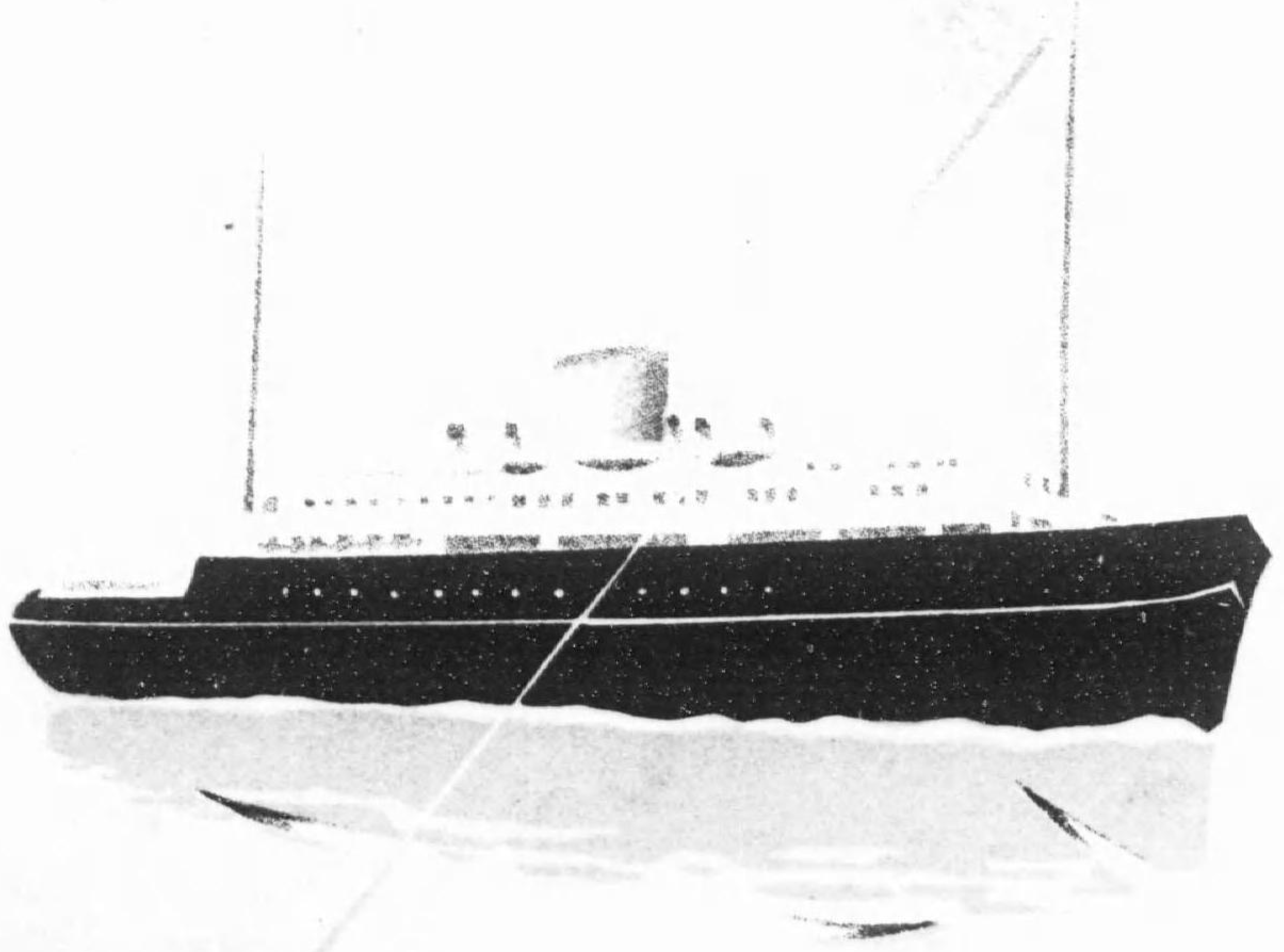
函館市役所

特219
497

始

業之函館

特219
497

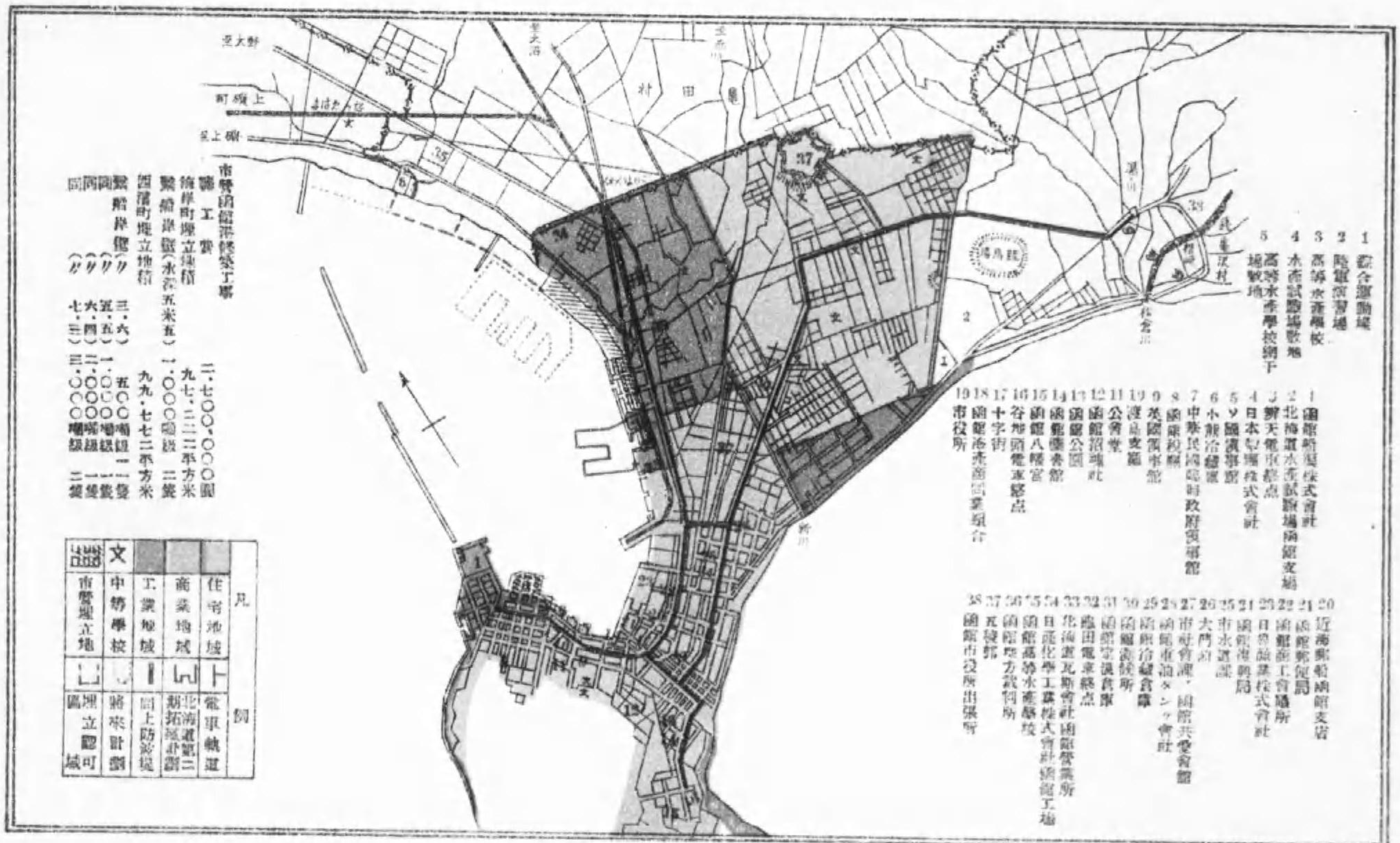


特219
497

産業之函館

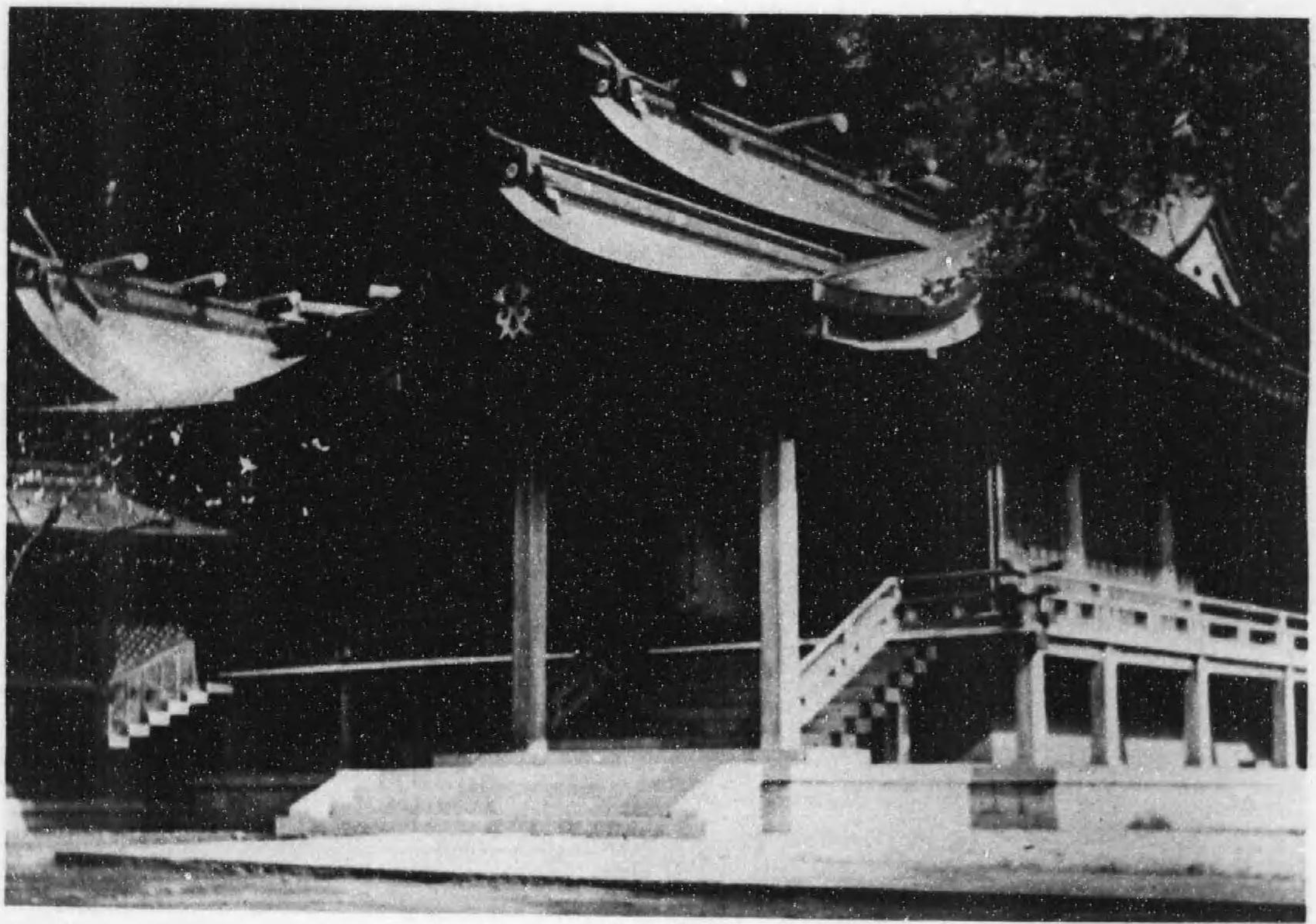
帝國圖書館藏

昭和十四年四月十一日津輕要塞司令部檢閱濟



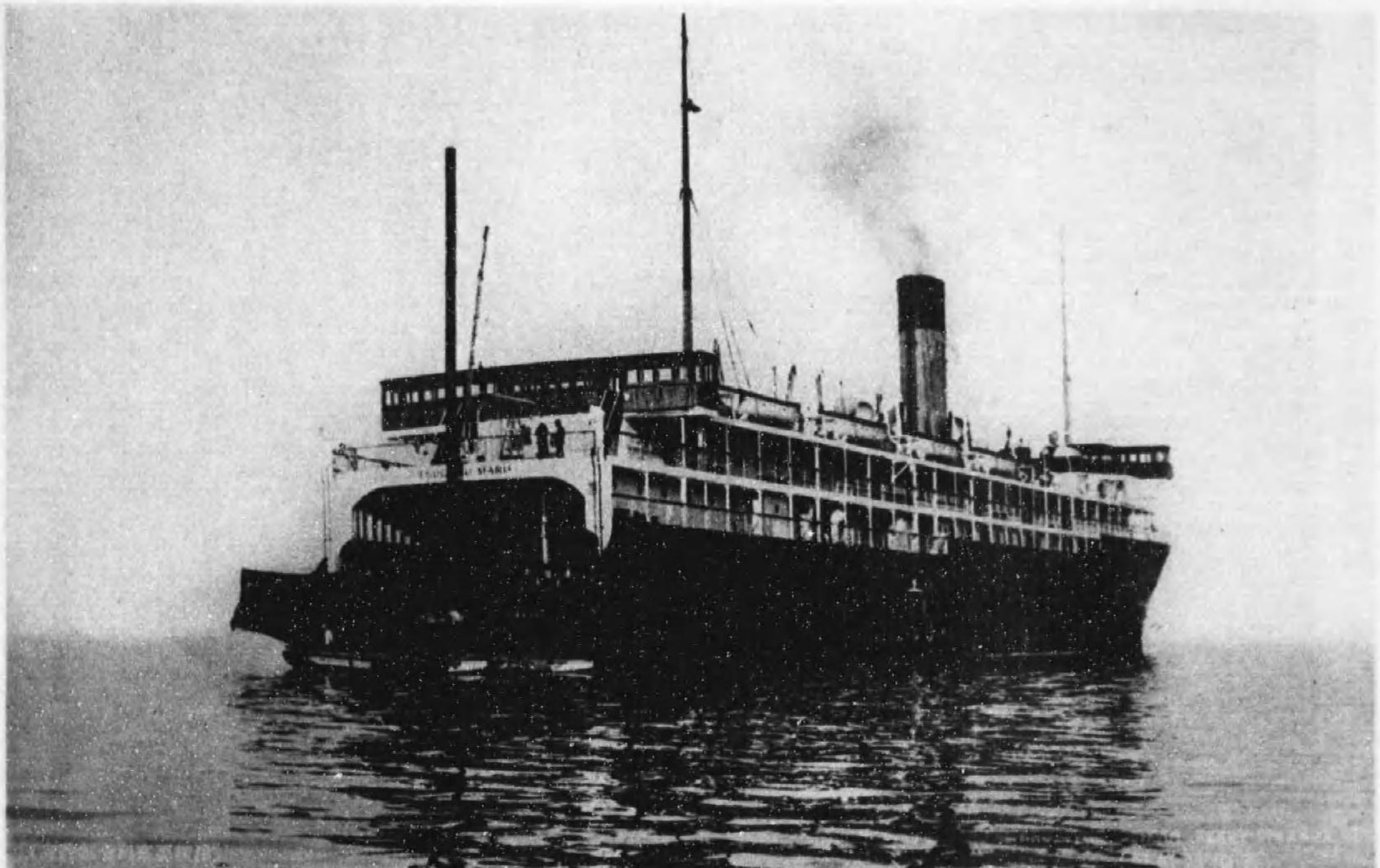
函館市全圖

昭和十四年四月十一日津輕要塞司令部檢閲濟



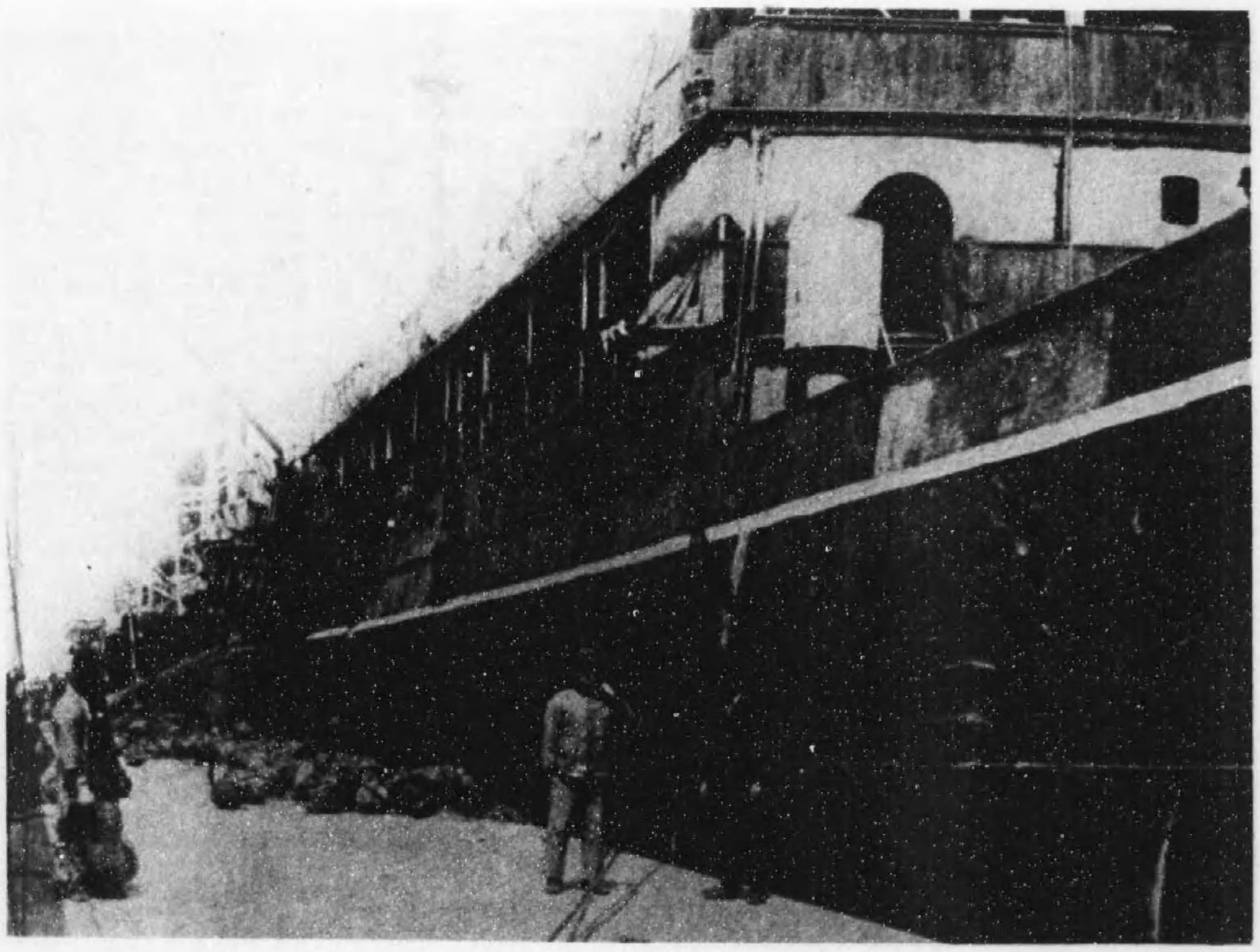
國幣中社 函館八幡宮

昭和十四年四月十一日津軽要塞司令部檢閲濟



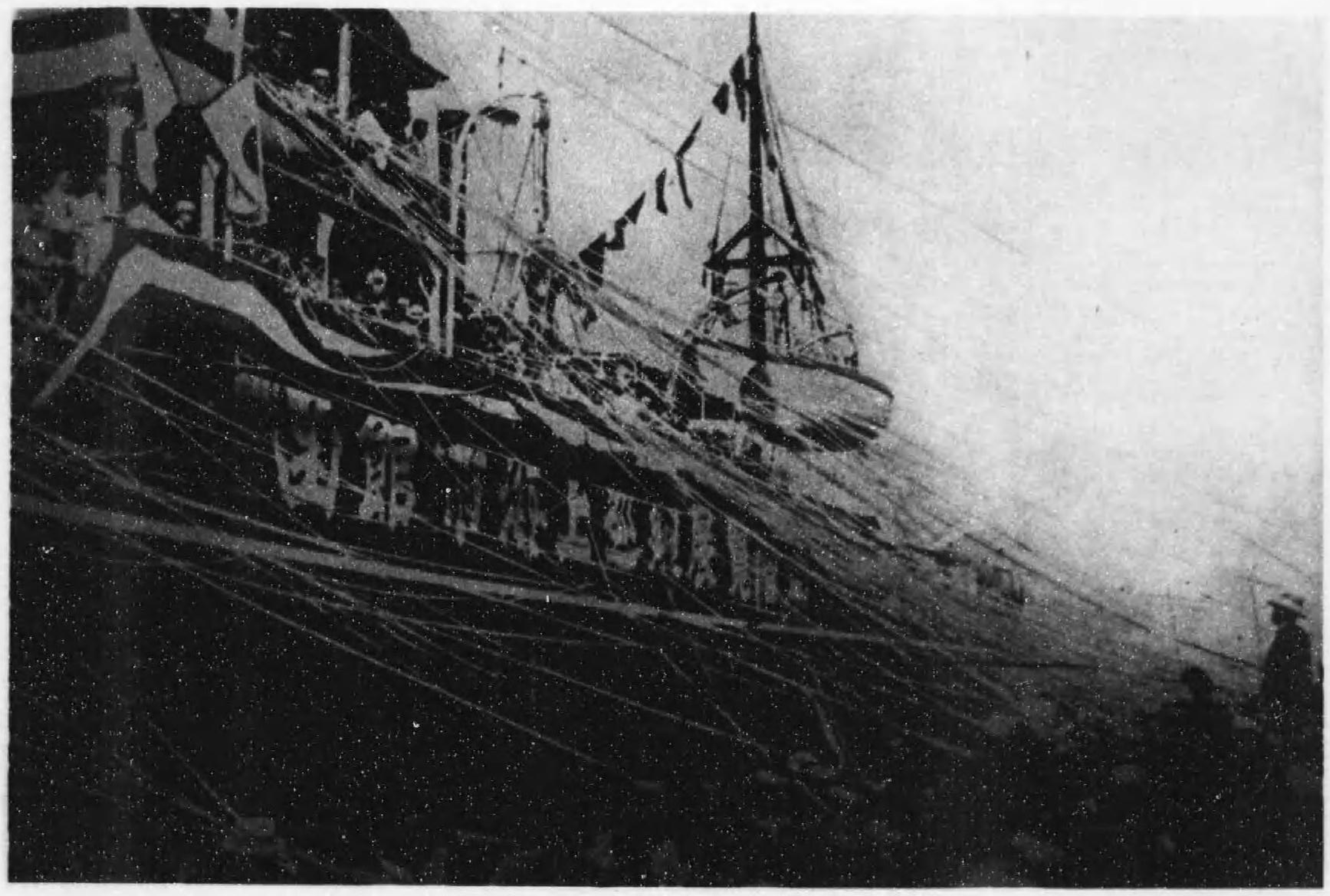
青函連絡船の雄姿

昭和十四年四月十一日津輕要塞司令部檢閲濟



西濱岸壁接岸荷役の光景

昭和十四年四月十一日津輕要塞司令部檢閲濟



巡航展覽會船出發の刹那

昭和十四年四月十一日津輕要塞司令部檢閱濟

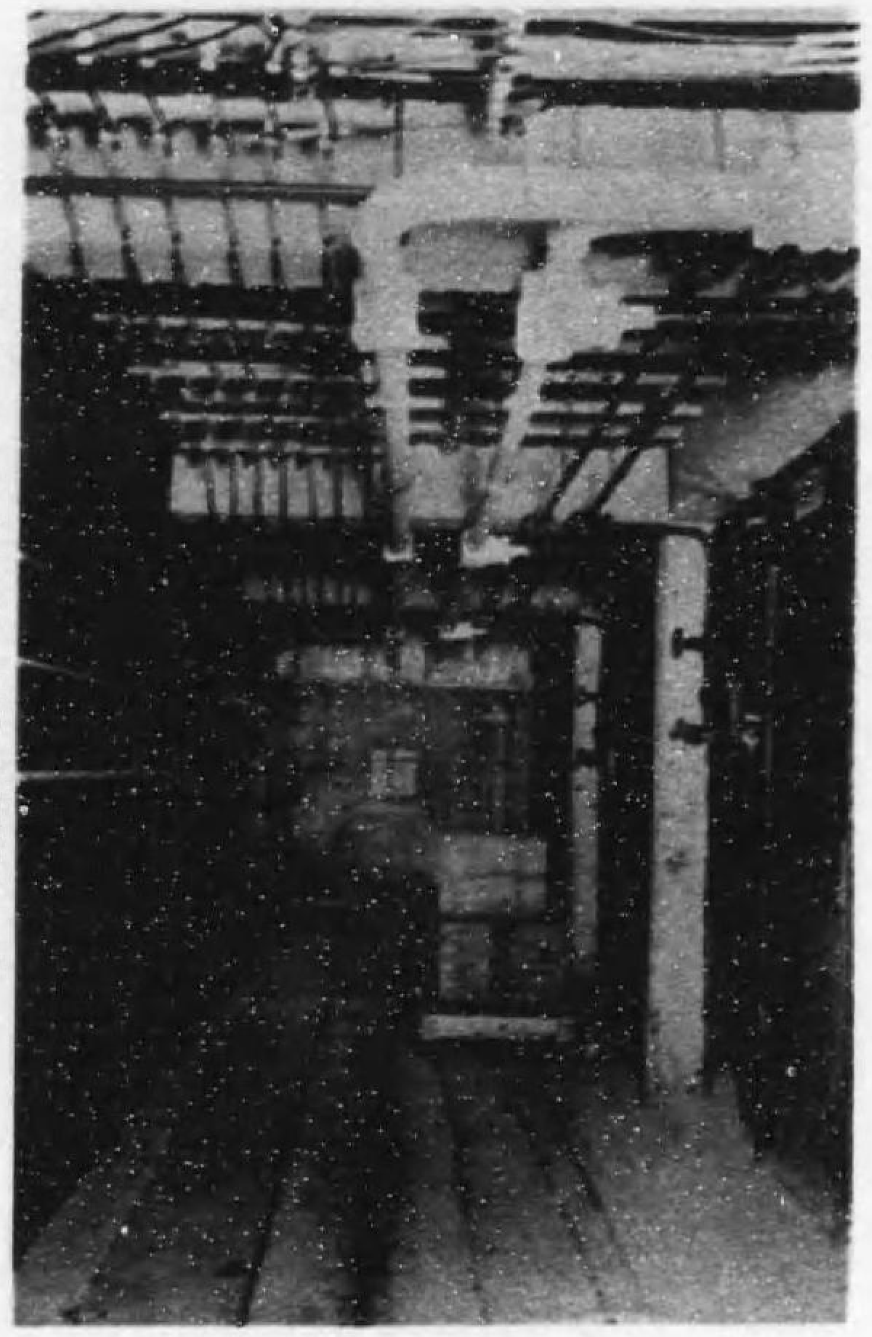
稅關構內勘察加行漁夫雜踏の光景

昭和十四年四月十一日津輕要塞司令部檢閲濟

柔魚釣發動機船の光景

昭和十四年四月十一日津輕要塞司令部檢閲濟

市長推奬産業功勞者平塚常次郎氏を社長とする
日魯漁業株式會社全景



市長推奬産業功労者小熊幸一郎氏創設に係る
小熊冷藏倉庫內の光景

市長推奬産業功労者坂本作平氏を社長とする
小川合名會社及東邦水産株式會社全景

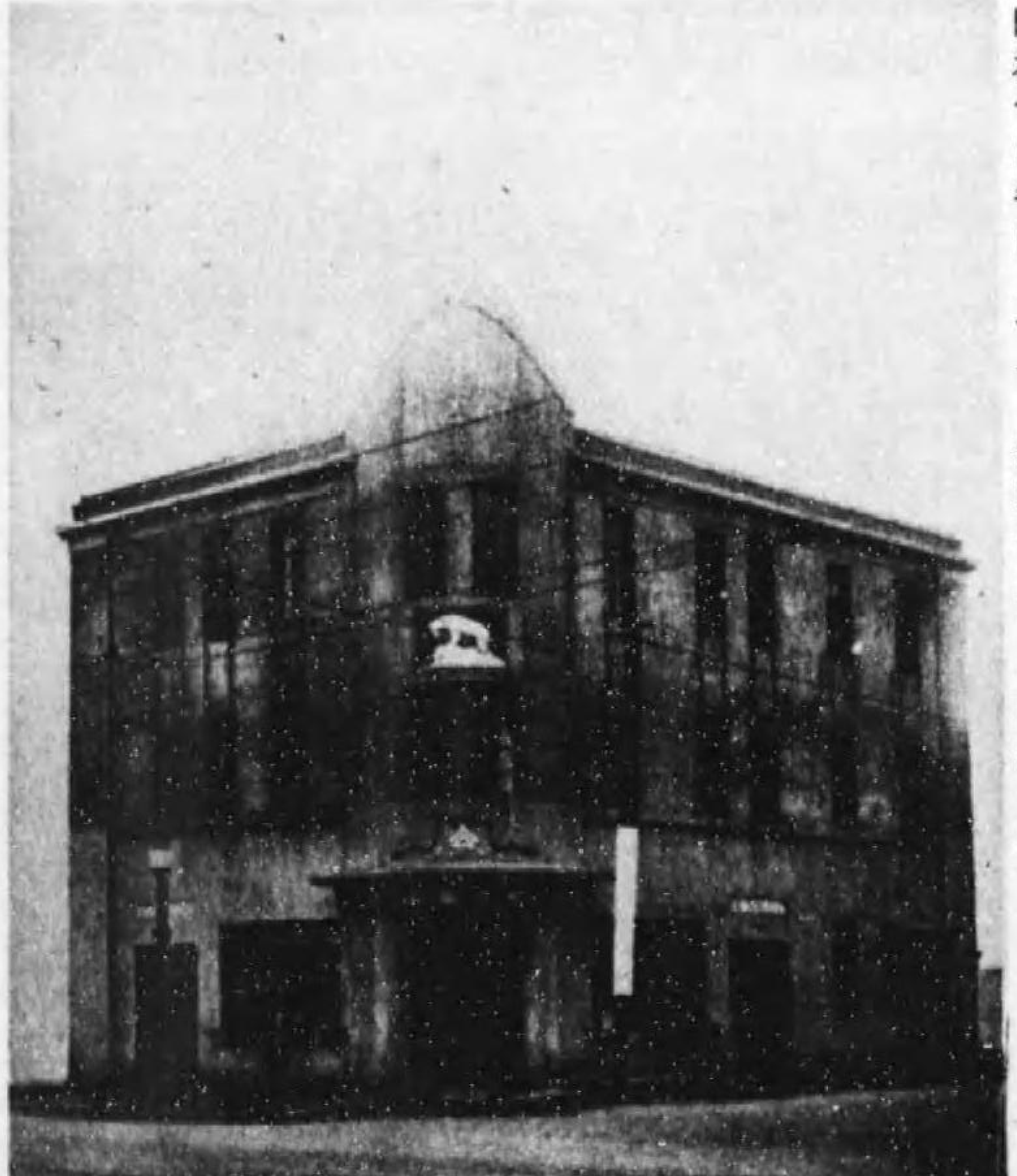
昭和十四年四月十一日津輕要塞司令部檢閲濟

昭和十四年四月十一日津輕要塞司令部檢閲濟

市長推奬產業功勞者渡邊熊四郎氏の創設に係る

金森ビルディング全景

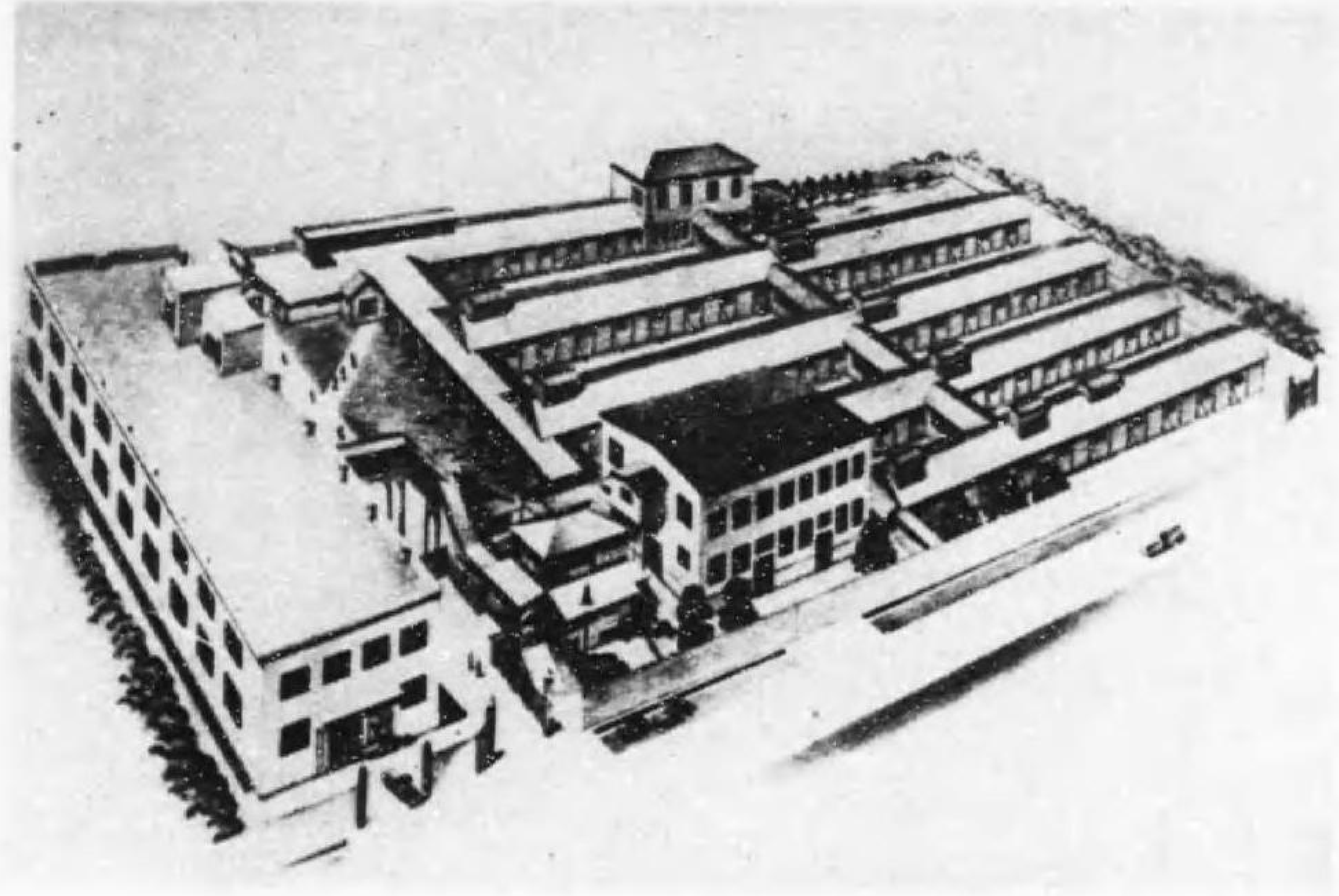
昭和十四年四月十一日津輕要塞司令部檢閲濟



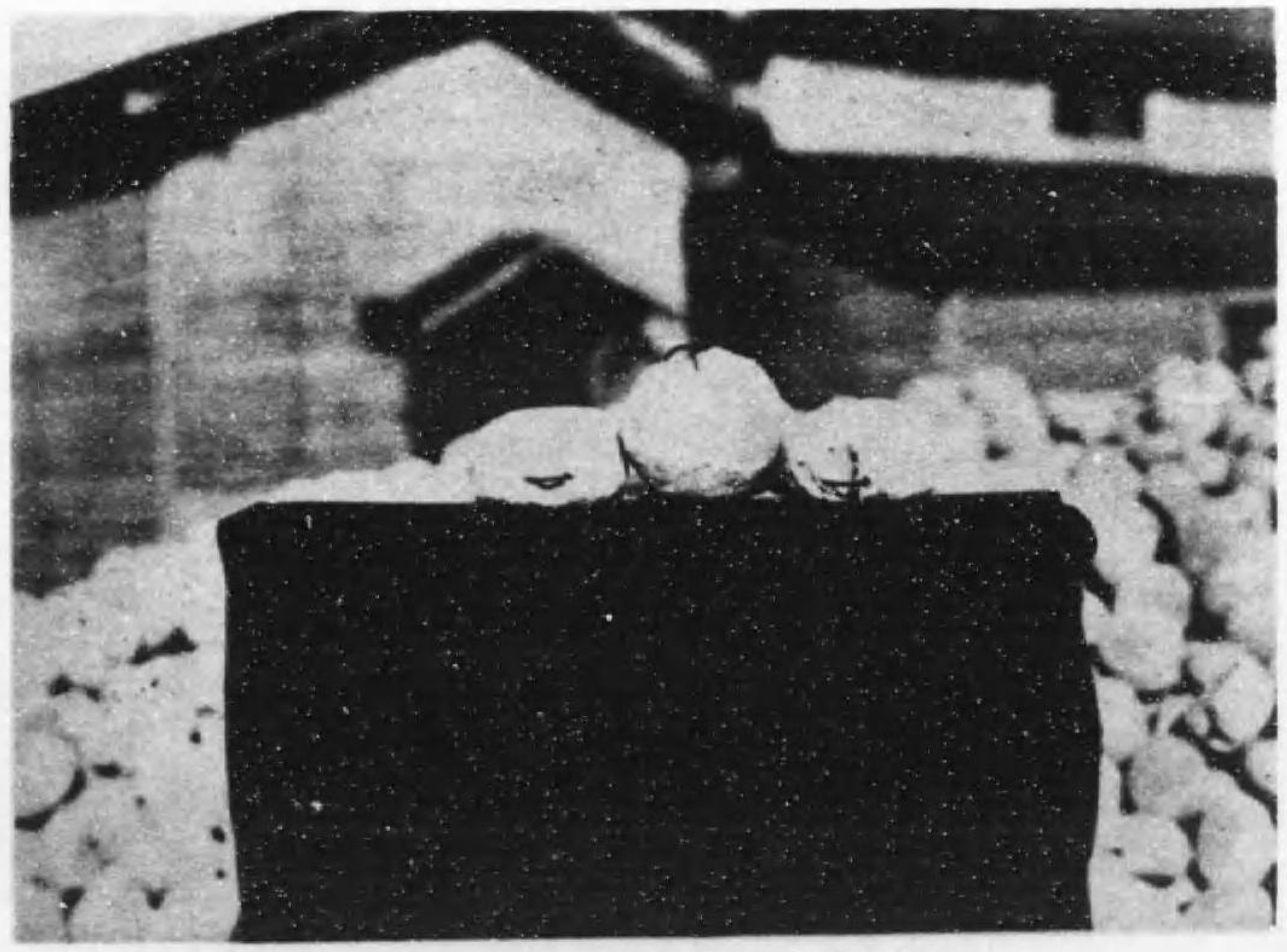
市長推奬產業功勞者故松下熊槌氏創設に係る

松下毛皮店全景

昭和十四年四月十一日津輕要塞司令部檢閲濟

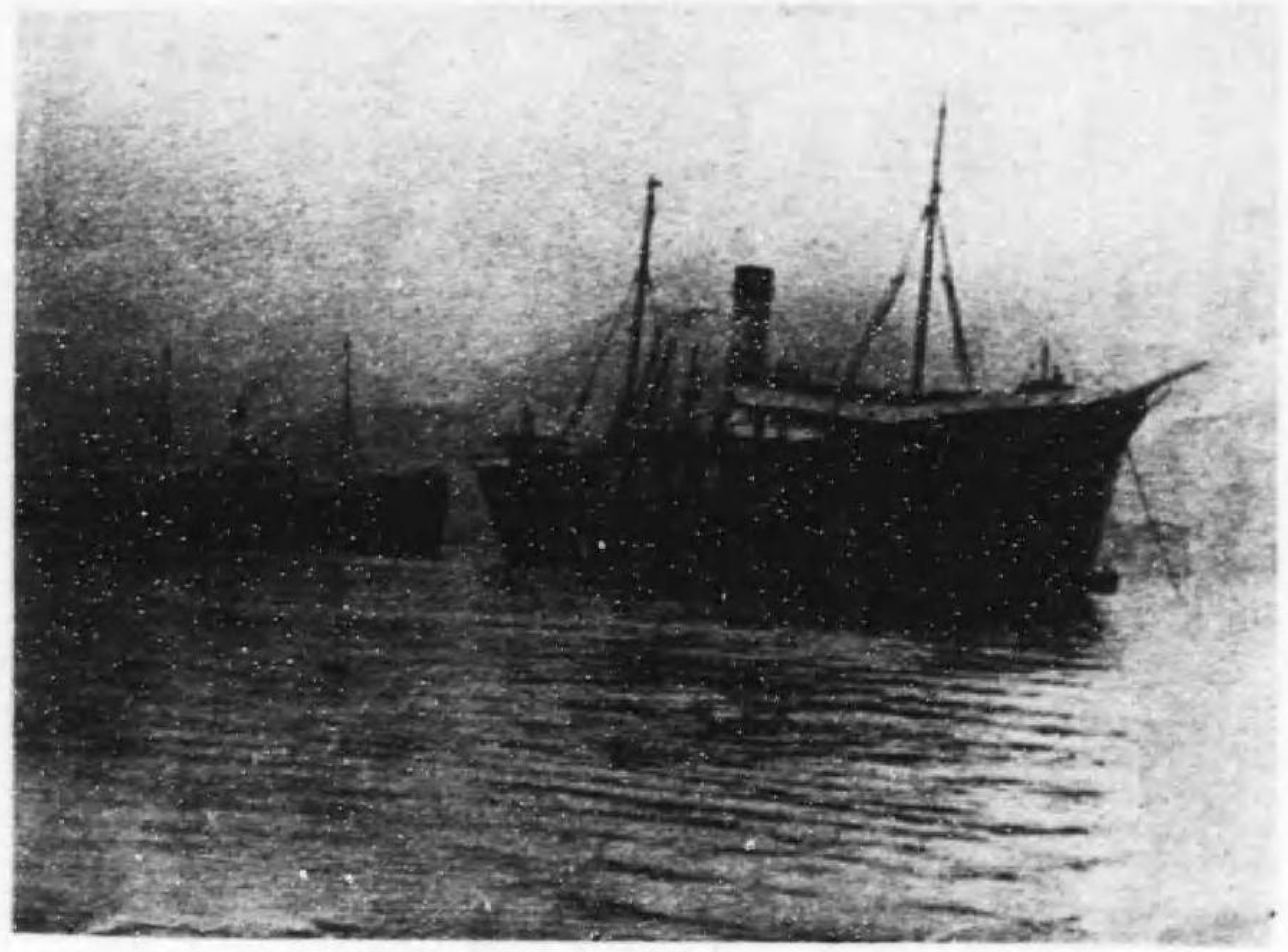


市長推奬産業功勞者岡本康太郎氏を社長とする
函館製網船具株式會社全景

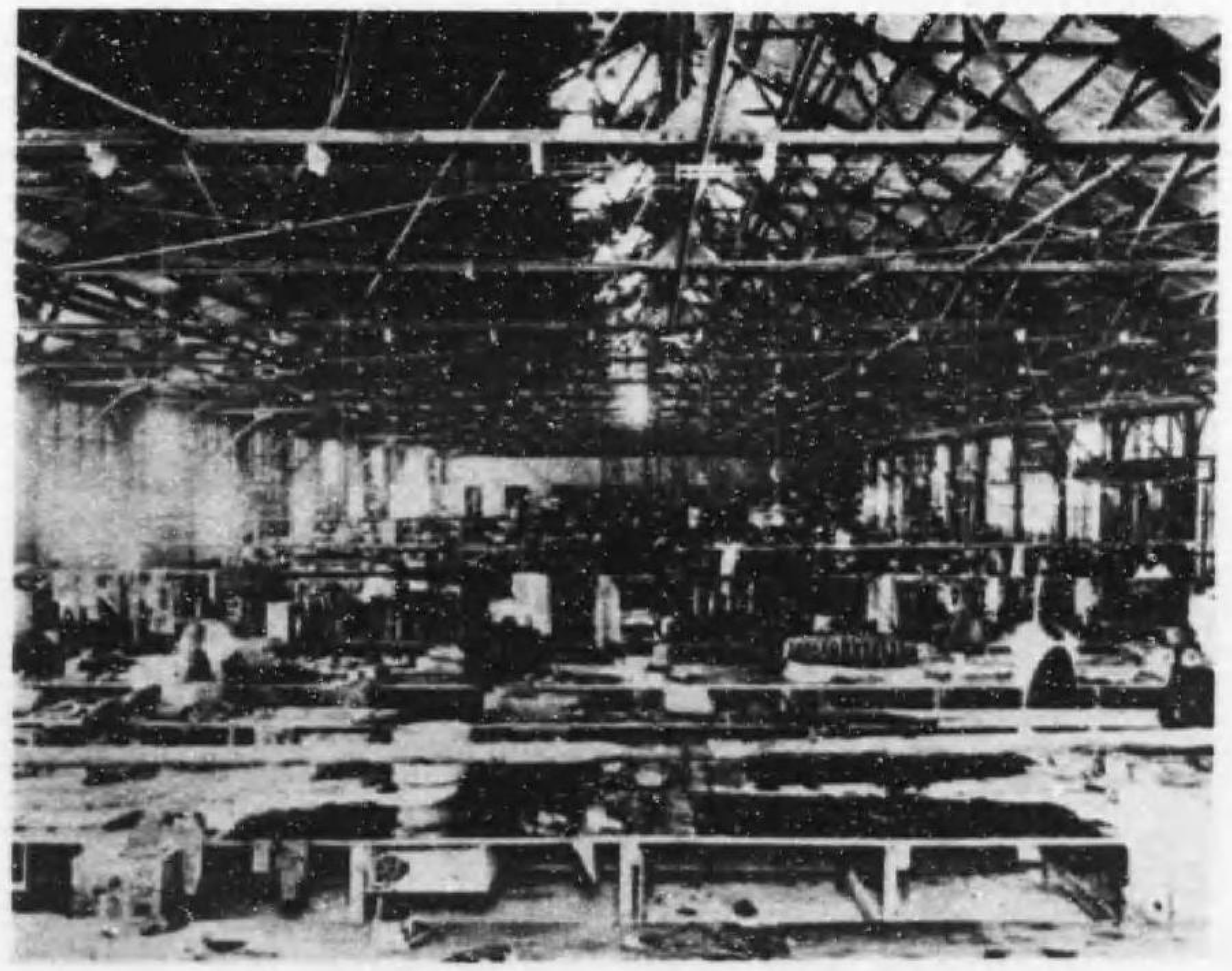


市長推奬産業功勞者谷本坂惠氏發明に係る
魚網沈子と田代工場

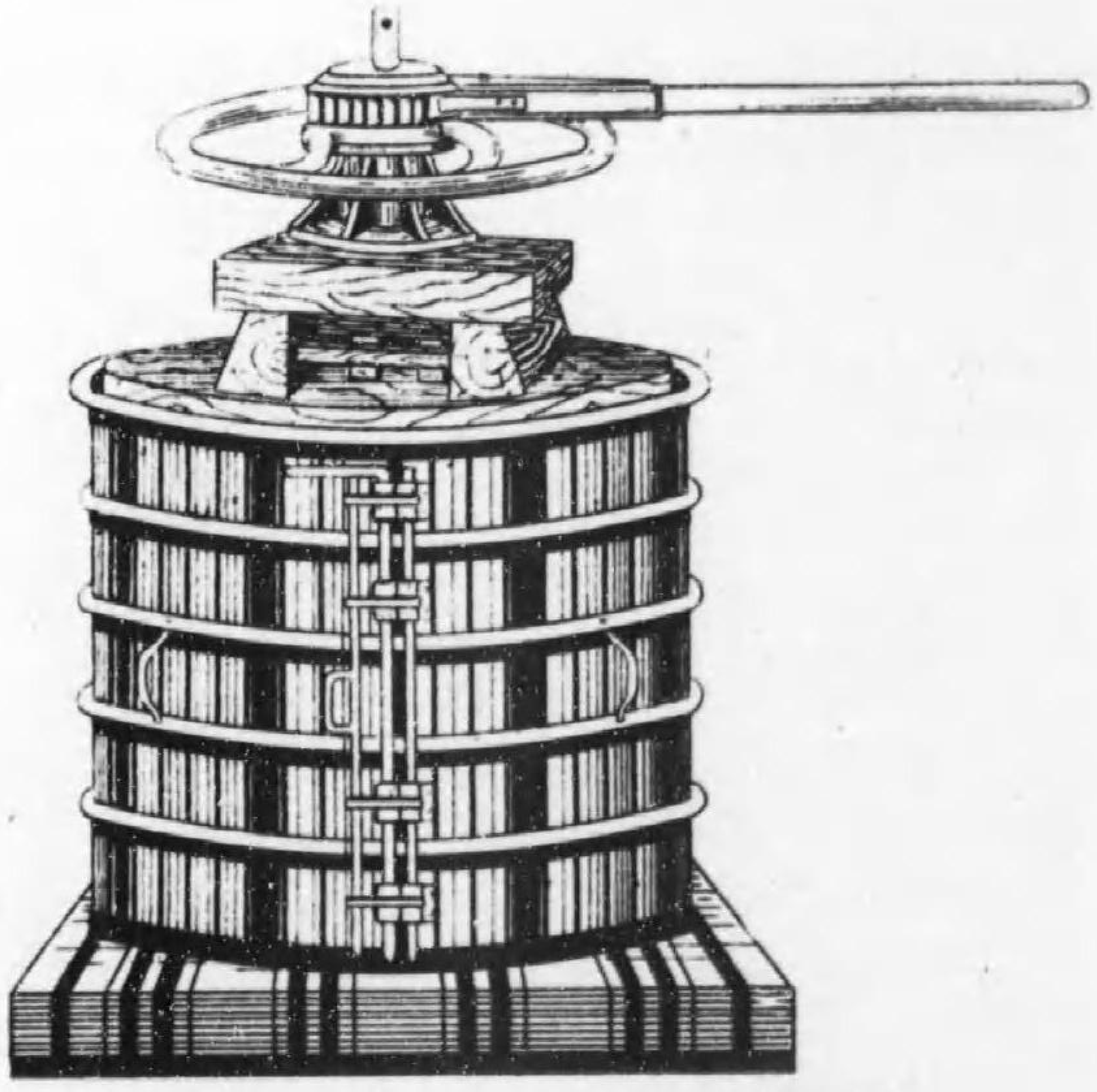
昭和十四年四月十一日津輕要塞司令部檢閱濟



市長推奬産業功勞者故平出喜三郎氏創業當時の
沖取鮭鱒母船



市長推奬産業功勞者故内川源作氏創設に係る
北海道ゴム工業株式會社第一工場



市長推獎産業功勞者水谷元右衛門氏發明に係る

水谷式魚粕壓搾機

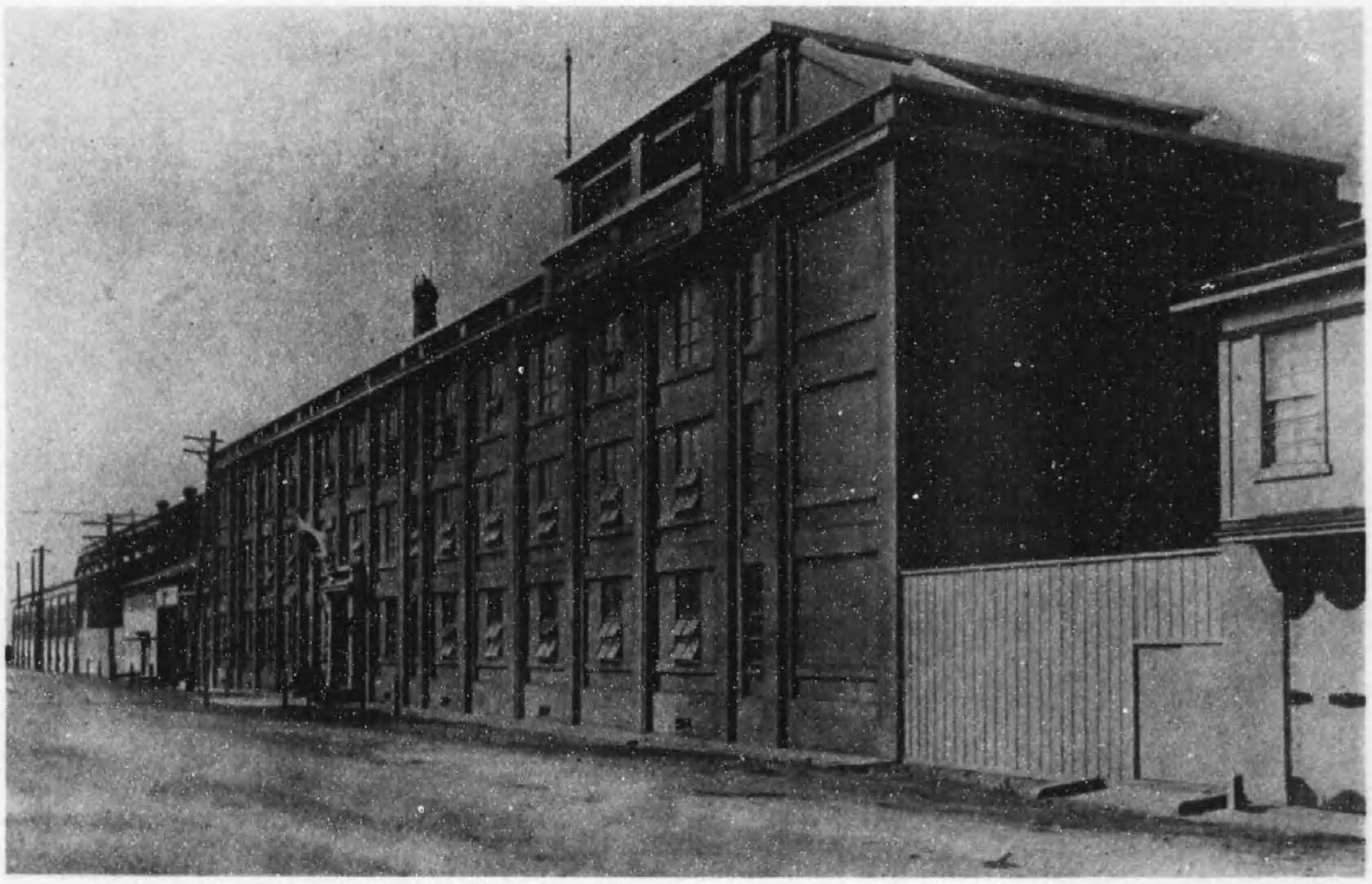
市長推獎産業功勞者關豊作氏發明に係る

關式揚網機

昭和十四年四月十一日津輕要塞司令部檢閲濟

函館公園白川橋

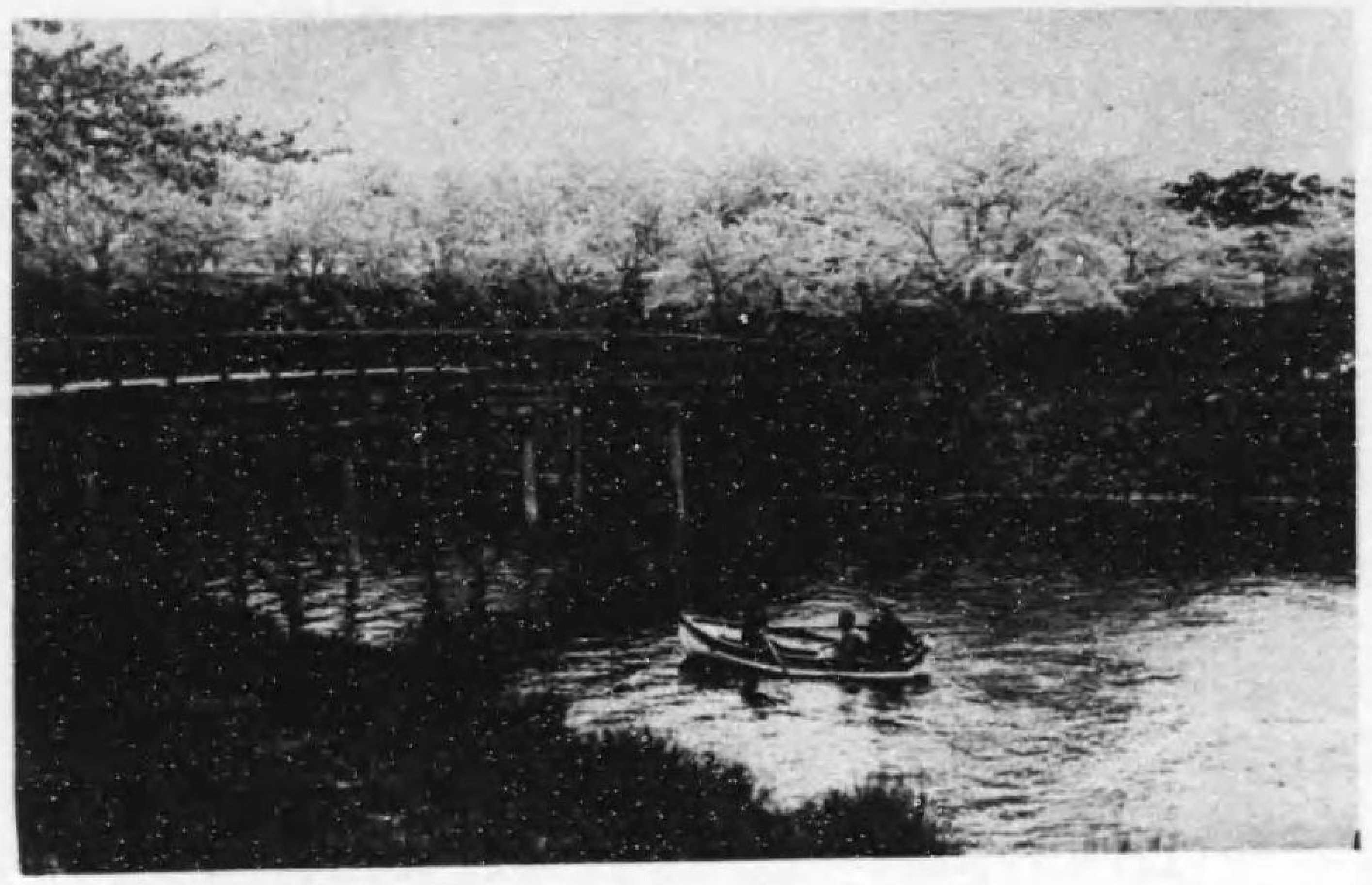
昭和十四年四月十一日津輕要塞司令部檢閲濟



景全社會式株渠船館函

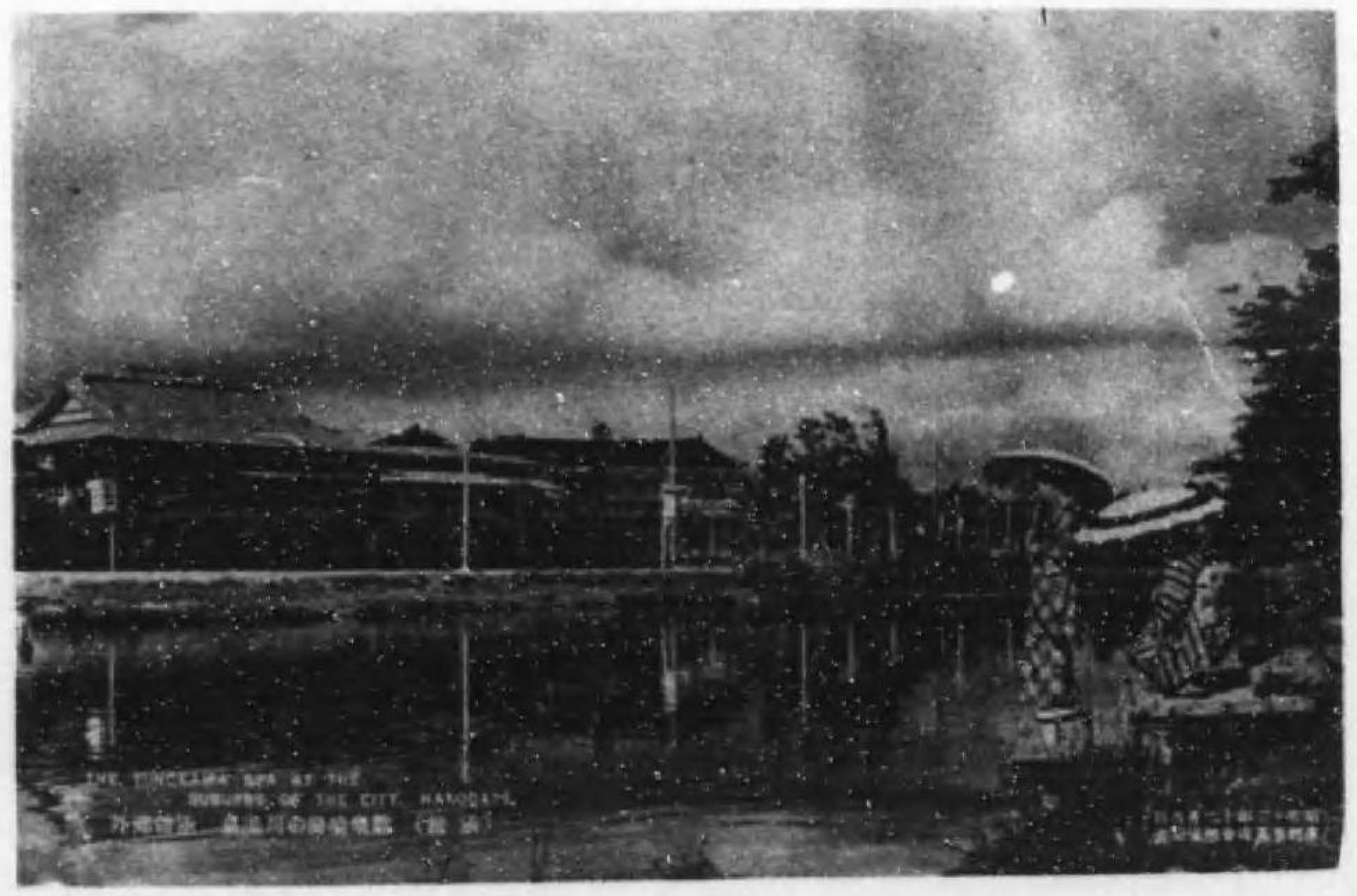
大沼公園

昭和十四年四月十一日津輕要塞司令部檢閲濟



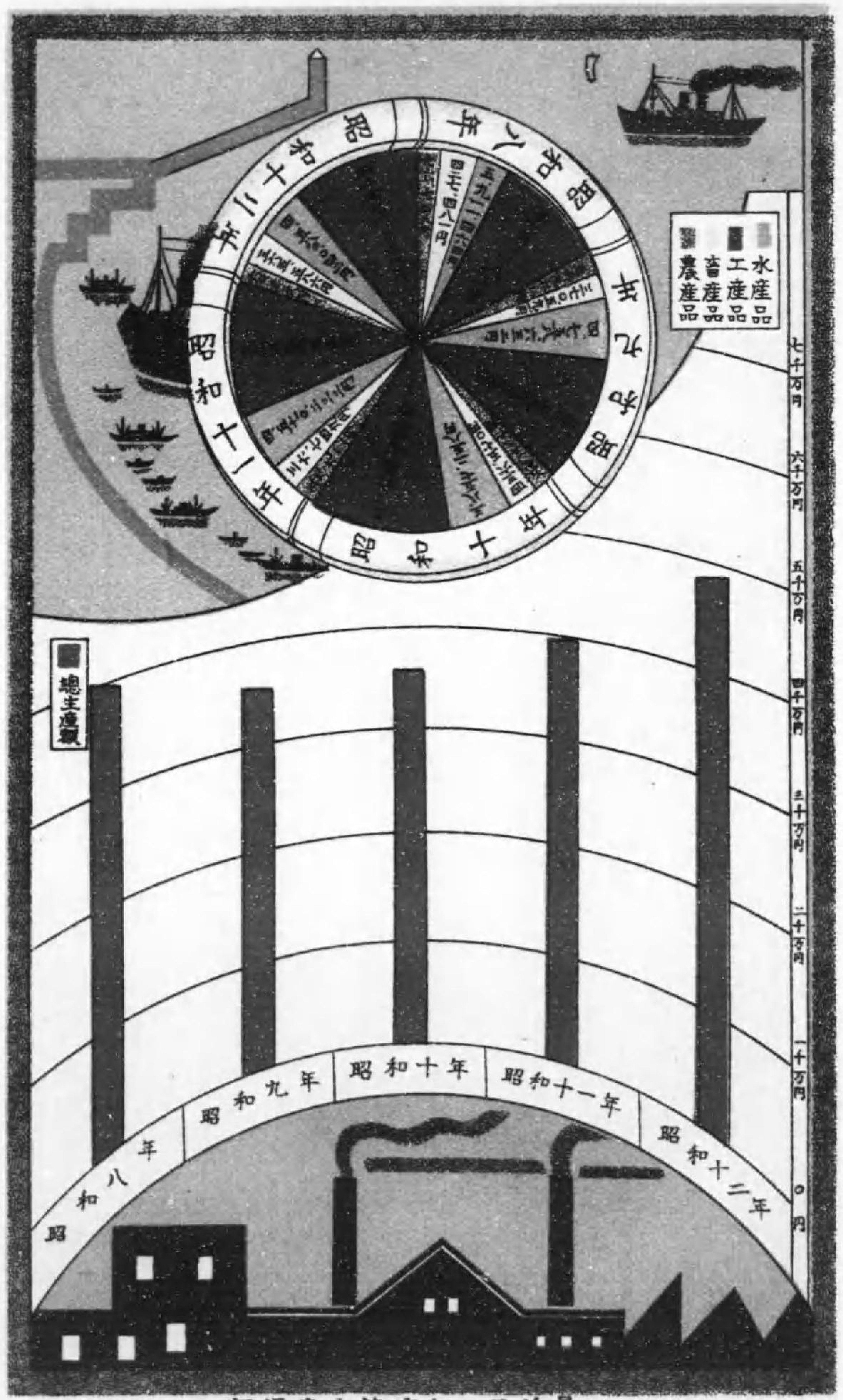
五稜郭

昭和十四年四月十一日津輕要塞司令部檢閲濟



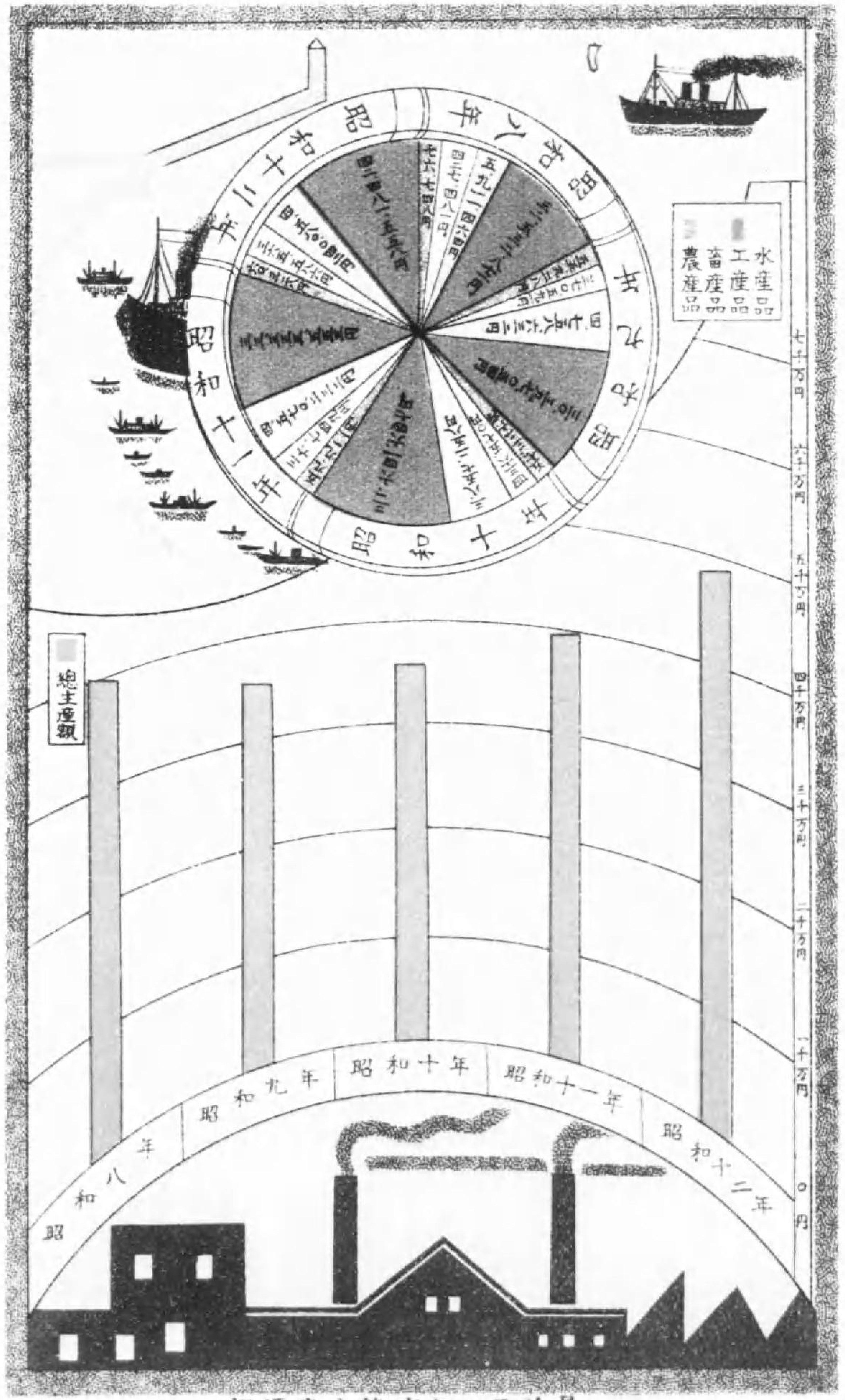
湯ノ川温泉

露光量違いの為重複撮影



最近五ヶ年市總生産價額

露光量違いの為重複撮影



最近五ヶ年市總生産價額

産業之函館

目次

はしがき

第一章　函館市概觀

一、市勢の大要……一
（イ）位置……一
（ロ）市街……一
（ハ）沿革……一
（ニ）戸口……二
二、港の現狀と將來……三
（一）第二期北海道拓殖計畫の大要……四
（二）保管設備……五
（三）臨港地帶……六
（四）調査機關……六
（五）都市計畫……八

三、航路の焦点……九
(イ)對內航路……九
(ロ)對外航路……一〇
(ハ)國補助航路……一一
(ニ)市命令航路……一三
(ホ)自由定航路……一三
四、工業適應地……一四
五、勞務者需供……一五
六、動力需供……一五
七、經濟地帶……一八

第二章　水產業

一、基本產業は水產業である……一九
二、水產市是と調查機關……二〇
三、北洋漁業……二三
四、母船式漁業……二七
五、北千島漁業……二九
六、沿岸漁業……三〇
七、淺海漁業……三二
八、水產加工業の現在と其の將來……三三

第三章　工業

一、工業の現在と其の將來……三六
二、工業市是と調查機關……三八
三、中小工業指導助長施設……四〇
四、工業營業別情勢……四二

第四章　貿易

一、貿易の現在と其の將來……四三
二、市貿易通信網……四五
三、漁業貿易は特徴である……四六
四、蘇國々營貿易の概觀……四八
五、貿易上より見たる顧客……五一
六、對內取引の概要……五三

第五章　運輸

一、海運の概要……五六

二、函館連絡船……五八
三、鐵道網……五九
四、道路網……五九

第六章　金融其の他

一、金融……六一
(イ)銀行……六二
(ロ)無盡會社……六七
(ハ)信用組合……六九
二、産業團体……六九
三、中小商業指導助長施設……七四

はしがき

港灣は函館の生命であると等しく、産業は、函館市繁榮の基本である。函館市は、産業第一主義を主唱すると同時に、港灣第一主義を高唱せねばならぬ、これ飛行機の兩翼と同樣であつて、産業を離れて、港灣施設は、其の意義なく、其の利用の十全を得られざるは、玆に架説を要しない。

而して函館市産業の基調は、農業でもなければ、林業でもなく、將又畜産業でもない、これ一に水産業であらねばならぬ、水産業を直系とする加工業でなければならぬ、函館港の天惠的地位並環境の資源を利用する加工業を傍系とする工業でなければならぬ、商工立市の市是も亦玆に淵源するのである。故に『産業の函館』なる小冊を綴るに當り、主として本市の國際的地位を概說し以て本市水産業の狀勢と貿易の要領を採錄して、本市の産業狀勢を紹介せんと努めた次第である。

昭和十四年早春

函館市産業課

第一章　函館市概觀

一、市勢の大要

イ、位置

函館市は、北海道の南端にして本州と相對し、米亞の交通幹線路てふ大圏航路に沿ひ東經百四十度四十四分、北緯四十一度四十六分に位してゐる。氣溫の点から見ると、彼の世界的に有名な產業都市である伯林や、ベルンと同一位で、眞に產業都市として、將又世界的な通商港として、天惠の地位を占めてゐるのである。

ロ、市街

市街は、南西背後の函館山麓より北に傾斜して港岸に接し、北西及東北の三面は、扇型に擴大して平坦であるので、市街はこの方面に、年々素晴しい勢で、進展して行くのである。

而して宏壯なる近代的大厦高樓は櫛比し、明るい文明鋪道は、常に殷賑を極め、街衢の美觀、山姿の端麗、港水の清澄は、眞に生ける一幅の繪畫であつて、日本の香港と稱へられてゐる。

尚本年四月より合併の湯の川溫泉街は療養並觀光の地として名高く、本市に杖を曳く方は必ず訪ふべき名所である。

ハ、沿革

函館の古名は蝦夷語の『ウスケシ』即ち『灣內の端』と云ふ意味である。

寳德年間河野加賀守政通居城を築き箱館と稱へた。

寛政十一年に（紀元二四四八年）幕府は蝦夷地警備を松前藩に命じ、商業の中心を箱館に置いてから、俄然貨物の集散、商船の輻輳等頻繁となりて、商港の礎石を据えたのである。

彼の一代の風雲兒高田屋嘉兵衛が、本港を根據地として、獨り對內通商のみならず、遠く露領方面までも雄飛したのも此の時代である。

嘉永六年米國水師提督ペルリの黑船が下田に來りて、和親貿易を請ひ、日米假條約成立の結果、安政元年三月我が函館港は開港せられたのであるが、爾來本邦五大開港場の一として、英、米、露、淸と互市を結び、此等諸外國は領事館を函館に開設した。之れ實に本市今日の殷盛の基礎を成したのである。

大正十一年十月市制實施と共に市勢は彌々膨脹し、彼の歐洲戰亂後の經濟戰の舞台は、太平洋上に移り、更に日支事變を契機として東亞の商權を確保するに到り、倍々本市は躍進すべき時運に立ち至つたのである。

二、戸　口

幕末時代には俗に『函館三千戸』と稱へられたが、明治元年には戸數四千二百五十二戸、人口一萬八千六百九人に上つた、而して區制實施當時即ち明治三十二年には戸數一萬八千九百九戸、人口九萬一千三百一人を算し、大正十四年國勢調査當時戸數三萬三千三百十八戸、人口十六萬三千九百七十二人、更に昭和五年國勢調査に於て、戸數三萬八千二百九十一戸、人口十九萬七千二百五十二人を數へた、而して昭和十年國勢調査に於ては大火災直後に拘らず、戸數三萬九千百九十七戸、人口二十萬七千四百八十人に達し、今や戸數四萬餘戸、人口實に二十三萬餘人に垂んとし嘗に本道否東北第一位の大都市たるのみならず、國內屈指の樞要都市たるの地位を占むるに至つた。

然も歷史ある開港都市なるが爲め外國人の來住者も亦年々多い。

二、港の現狀と將來

函館港は、市街の北西に當り、西葛登支岬と南大鼻岬とが相擁した函館灣の奥部に巴狀の灣入を爲してゐるので、俗に巴港と呼ばれてゐる。然も港は津輕海峽に接し航海路線より遠からずして港內水深く、船舶碇繫に至便で、昔から『綱知らずの港』と稱へられた所以である。由來函館市は港が生命であり、然も其安全碇泊地は船舶の輻輳する源泉であつて、これが又淺海漁業にも、沖合漁業にも、將又北洋漁業をも招來した基調であつたのである。

然し時世の進運は、單に自然のまゝなる安全錨地のみの港では、滿足するを得ない、進んで近代的な港灣設備によりて、船舶碇繫に、接岸荷役の至便に、保管設備の完備に、海陸聯絡の十全を計るにあらざれば、經濟戰の落伍者となるは幾多の港史に、餘りにも明かなのである。明治四十二年、北海道廳が第一期拓殖函館港灣計畫に於ては、修築工費百四十餘万圓を支出し、僅かに港口一文字に九百十八米の島狀防波堤を築造して西風を避け、二條の防砂堤を築設して、廻流漂砂を遮斷するの施設を爲したるに止り、『天然の良港』たる名辭に災せられ、文明的港灣施設を怠つたかの感を强めるのである。

恰も昭和初年、本道第二期拓殖港灣計畫に際して、は當局も能く本港の使命を理解され、市民亦猛然立つて、其設備の急を絶叫せられたので、能く本港貿易進展に順應するの計畫を樹立せられ工費約千百餘萬圓で目下工事進捗中である。而して本港の修築は國費のみに信賴はしない、函館市民は拓殖計畫の進捗に伴ひ約三百萬圓の市起債を以て、協心戮力以て內港設備として、西濱町及海岸町修築を實現したのである。

然し省ると當港岸一帶の整理問題や將又港內整理や漁港問題は取殘されてゐる重大案件であるが市財政の按排を考慮して施設せねばならぬのである。

我が函館は、眞に港の函館として、對內的に對外的に、積極進出策の一途に出でるには、港の設備は眞に緊要である。

切言す、帝國北方政策の伸張は、國家經濟上の重要なる問題であつて、其策源地であり而も東西洋の連絡中心点として、國際的立場にある函館港、本道及本州接續地なる函館港の使命や夫れ重大であらねばならぬ。

(一) 第二期北海道拓殖計劃の大要

本港修築の急務は、前述の如くなるを以て、曩に北海道第二期拓殖港灣計劃確立に際し、大正十五年十月六日內務大臣官邸に於て臨時函館港灣調査會開催せられ、朝野知名專門家を委員として、別圖の通り修築根本方針が決せられた。

第五十二帝國議會に於て協賛を得た、北海道拓殖第二期港灣計劃に於ては、國費約一千百餘萬圓で本港の施設を略完成することになつたのである。即ち現在防波堤を延長する事六百六十七米、三百六十四米の港口を存し、第二の島狀防波堤千九十一米を第三防砂堤に向つて築造し、同防砂堤との間に五百四十六米の第二港口を設くるのである。

之により被覆さるゝ安全な水面は、約六百五十一万平方米に達し、現在の有効水面積約百八十八万平方米に比し約三倍半となり、而も工業地に適する廣漠たる龜田平野の臨港地帶も、亦安全となり且直ちに活用せらるゝやうになるのである。

而して內港設備としては、第一防砂堤から大型汽船を横付にして、繫船埠頭二基を築造し荷役することが出來るのである。

(二) 保管設備

港灣都市として、保管設備の完備せると否とは、港勢發展上重大なる關係を有するは論を俟たない。

由來本市は、中繼貿易は其の骨子で、然も海產物市場が特色なるが爲、大量積貨物出入が自然の勢である、從つて保管設備の完備と低廉なる保管料を望んで止まないのであるが、近年万代町以北の工場地帶の目覺しき發展と共に著しく上屋倉庫の新設を見つゝあることは甚だ喜びに堪えない所である。

而して特種倉庫としては、小熊冷藏庫と函館冷藏倉庫と函館定溫倉庫とであるが、海產物市場として是等冷藏倉庫の存在は本市の特異性を發揮するもので、水產物加工業の發達を助長し倍々重

要性を加ふべきである。

（三）臨港地帯

本港は、獨り天與の良灣入をなすのみならず、適度の水深を有し、海渚尚三米港内中部七米六二防波堤内側一二米九以上に達し、而して津輕海峽より灣入深からず、之を港灣技術者より見るも將又航海技術者より見るも眞に本邦に其の比を見ざる良港である。

現在の臨港地帯の利用を述ぶると、新濱町より西濱町埋立一帯は倉庫地帯であるが、海岸町方面は工業地帯として近年素晴らしい發展を示し、尙前途があるのである。殊に本港の東北一帯に亘る龜田平野は坦々として海岸に擴まり前述の如き海陸聯絡の設備を整ふるに於ては、優に千三百二十二万平方米以上を利用し得る優良地帯を立ち所に得るのである。而して中に水量豐富なる河流あり運河網を整ふるに適する地として、本港修築と相俟つて等しく內外企業家の注目する所となつてゐる。

（四）調査機關

港は函館市の生命である。港の設備及其利用並其他重要事項の研究は常に怠つてはならぬ、故に市長諮問機關として大正十四年六月市に函館港灣調査會を設置し、昭和十二年八月更に函館港利用調査委員會を設立するに到つたのである。

委員は市長之を囑託するのであるが、學者、實業家、其他各關係者を網羅して、衆智を集め以て

其目的を達成せんとするに外ならぬのである。所謂港灣市是の確立は本機關の與る重大案件である。

（參　照）

函館港灣調査會規程（大正十四年六月六日）

第一條　本會ハ函館市長ノ諮問ニ應ジ函館港ニ關スル重要事項ヲ調査審議シテ施設ノ完成ヲ促進シ其發展ヲ期スルヲ目的トス

第二條　本會ハ委員若干名ヲ以テ之ヲ組織シ委員ハ市長之ヲ囑託ス

第三條　本會ニ會長副會長各一名ヲ置ク會長副會長ハ委員ヨリ之ヲ互選ス會長故障アルトキハ副會長之ヲ代理ス

第四條　本會ニ顧問若干名ヲ置キ市長之ヲ囑託ス

第五條　本會ノ事務ヲ處理スルタメ幹事及書記若干名ヲ置キ市吏員中ヨリ會長之ヲ囑託ス

函館港利用調査委員會（昭和十二年八月七日）

第一條　函館港ノ港勢隆運ヲ期スル爲メ本市ニ函館港利用調査委員會ヲ置ク

第二條　本會ハ本港ノ設備並ニ利用增進ニ關スル重要ナル事項ヲ調査審議ス

第三條　本會ハ會長一名、副會長三名、委員若干名ヲ以テ之ヲ組織シ委員ハ會長之ヲ囑託ス

第四條　本會ニ學識經驗アル顧問若干名ヲ置キ會長之ヲ推薦ス
第五條　會長ハ市長之ニ當リ副會長ハ市助役函館商工會議所會頭及函館市會議長ヲ推ス
第六條　會長ハ會務ヲ總理ス、會長事故アルトキハ會長ノ指名スル副會長其ノ職務ヲ代理ス
第七條　本會ノ事務ヲ處理スルタメ幹事及書記若干名ヲ置キ市吏員中ヨリ會長之ヲ囑託ス

(五) 都市計畫

本市は、半島上の市街地たる關係上、其の利用面積比較的狹隘で、人口密度僅に一人當七十一平方米に過ぎずして、此の趨勢は急劇なる市勢發展に伴はないのである。故に本市の都市計畫は行政區域に局限せらるゝことなく、經濟的に社會的に密接なる關係を有する疆域を包括して、之を定めたもので即ち隣接せる錢龜澤村、舊湯川町、龜田村、大野村及上磯町の五ヶ町村の各一部を包括する地域に亘り、其利用面積七千九百三十四万二千四百六平方米、現在の約四倍にして收容人口四十六万八千九百七人であつて、昭和五十二年に於て飽和に達する豫見である。

本市は、從來屢々大火災に遭遇し、全市の大半を焦土と化し巨萬の資産を灰燼に歸せしめ、都市の發達を阻害せられ、其の都度全市民は復興の爲め多大の犧牲を拂ひ、幾多の辛酸を甞めたのであるが此等過去の事跡に鑑み、市街を横斷する現在の銀座通りに火防道路の設備をなし又街路の雜然たるは火防上、産業上、交通上不利にして、且街衢の美觀を傷付けること夥しきを以て特に多大の注意を拂ひ幹線道路の計畫を樹て、其の延長約十一万米で內約六千米は植樹帶幹線道路である。

更に地域の設定に當つては都市發達の趨勢と、市街の現況に鑑み、之を定むるを適當と認め、風光明媚なる函館山一帶の高燥の地と、五稜郭、千代ヶ岱方面は風物快適にして健康に適し、二者孰れも住宅地域と定めた。

而して中央函館港を中心とする一帶の平坦にして、街衢整然たる現在の商業地は、之を商業地域と定め辨天岬一帶と万代町より東北の臨港地帶及宇賀浦町、砂山町、金堀町の海岸に接する部分は工業地域と定めたのである。

前記の外、相生、春日、住吉町の各一部と山背泊町一帶は、市に於て漁港修築計畫の意圖もあり將來近海漁業に依る水産物の加工地に適し、之を工業地と定め、住居地內の主要道路の兩側には商業地域を配し、日常の便利に供してゐる。

本市は、既に昭和六年九月本計畫に伴ふ東部町名地番改正を終り、目下幹線道路の工事着々進行中であり、近く本計畫完了せば『北日本の都』たるを見るであらう。

三、航路の焦点

北方航路の焦点

本港は、津輕海峽の咽喉を扼し、自然的に內外航路の要点を掌握し、交通幹線路の焦點である。

(イ) 對內航路

史を繙くに、和船交通の紀元は甚だ文獻に乏しきも、元祿年間沖の口に於て、酒に課税する記錄

を見、又寛政十一年箱館及佐井間の聯絡航路の開始したるを想見する時は、本港は如何に古く沿岸航路の要衝なりしかを想察する事が出來る。下つて明治六年二月函館、青森間の定期航路開始せられたるは、靑函連絡航路の紀元をなすものである。明治四十年函館靑森間航路が、國有鐵道の經營に移され、其設備は十全せられたのである、其他太平洋臨海諸港及日本海沿岸諸港間にも自由定航線は、充實し來たのである。現時に於ては北海道廳命令補助航路十八線なるに本港を基點とするものは八線を占め、又樺太廳命令補助航路七線と、遞信省命令航路の樺太線、及朝鮮總督府一線、其の他函館市補助指定航路三線の外沿岸自由定航線は、到る所に航路網を張らざるはなく實に蜘蛛網同様である。今後、港灣施設並に商圈の擴張と共に、益々其頻繁の度を加ふ可きである、眞に函館港は北方沿岸航路の焦点である。

(ロ) 對外航路

飜つて本港對外航路の現況を見るに、安政年間所謂黑船來朝により安政元年函館開港して以來帝國北方に於ける重要港灣となつたのである。而して現時の狀勢を見るに、帝國南方航路集中策に遠ざかり、兎角命令航路の恩典に浴せざるの憾みがあるのである。現在僅かに遞信省命令航路として、函館勘察加線、及朝鮮總督府大連線の二線あるの外、自由定航路としては函館上海線、函館北米線の配線がある。抑も現時に於ける米亞の交通路としては、宗谷海峽線、津輕海峽線、關門海峽線の三者であらねばならぬ、而して此の横斷航路は北極に接近するが故に、米亞交通路として距離の點よりすれば宗谷海峽線は最も近距離なるも餘りに北偏する關係上、冬季の流氷と夏季の濃霧との支障ありて航海業者の最も忌む所である、關門海峽は距離と潮流の點に於て欠點があり、獨り我が津輕海峽は航海の安全と短距離の點に於て最優勝の地位を占めて居る。即ち北米より津輕海峽を通過して浦汐に航するには五百五十浬の近距離で、浦汐港に直航するに於ては關門迂廻よりは實に千二百浬の短縮である、まして北滿に於ける首都新京及北鮮終端港との連絡も既に全通せるを以て、北鮮港と我が函館港を直通し、北米諸港に連絡せんには、これ眞に米亞交通路の一大變遷といふべきである。之を要するに我が函館港は單に北海道の玄關として將又沿海航路の焦点たるのみならず、日本海上の貿易と太平洋の貿易とを融合せしむべき『ジャンクション』たるに於て强味である。

(ハ) 國補助航路

	月	
遞信省命令航路		
函館ペトロパウロスク線	一回	栗林商船
函館樺太線	三—六回	近海郵船
北海道廳命令航路		
函館根室甲線	一—二回	近海郵船
函館根室乙線	二回	嶋谷汽船

函館釧路線	四—五回	金森商船
函館鹿部線	一〇回	渡島汽船
函館小樽線	一〇回	藤山海運
函館擇捉東廻線	一—三回	金森商船
函館擇捉西廻線	二—六回	金森商船
函館占守線	二—三回	近海郵船

樺太廳命令航路

大阪函館小樽樺太線	六回	北日本汽船
東京函館小樽樺太線	六回	北日本汽船
伏木函館安別線	三回	北日本汽船
函館能登線	二回	北日本汽船
大阪函館惠須取線	二回	近海郵船
大阪函館大泊線	一回	川崎汽船
大阪函館敷香線	五回	川崎汽船

朝鮮總督府命令航路

北海道大連線	四回	嶋谷汽船
北海道北鮮線	二回	嶋谷汽船

(ニ) 函館市命令航路

函館北鮮線	一—二回(年一八回)	嶋谷汽船
函館三陸線	二回以上	三陸汽船
函館下北乙線	一〇—三月五回以上 四—九月一〇回以上	奥佐運輸

(ホ) 自由定航路

函館釧路線	二回	嶋谷汽船
北海道北支線	一回	嶋谷汽船
東京函館小樽線	五回	近海郵船
神戸函館小樽東廻線	六回	近海郵船
阪神函館小樽西廻線	三回	近海郵船
北海道上海台灣線	一回	川崎汽船
函館奥尻線	一—五回	渡島商船
根室函館上海線	一回	日本郵船
根室函館大連線	一回	日本郵船
北歐線	四週一回	日本郵船
小樽函館新潟線	一回	荒田商會

函館青森線	毎日一回	函館汽船
蔭下海岸線	毎日一回	函館汽船

四、工業適應地

我が函館は、眞に工業適應地であるのである。世人動もすれば函館市の地勢を大觀するに、單に函館山の容姿のみを美眺して、廣大なる平原の横はるを看過し地積狹少を唱ふるものあるも之れ謬說である。

市街の東部は、廣漠平坦なる龜田平野にして、中に河流ありて運河網を劃するに至便なるのみならす、坦々臨海汀浦に接し、眞に理想的な臨港工業地帶として、約一千三百二十二万平方米を包擁してゐるのである。

殊に第二期北海道拓殖函館港修築成り防波堤が完成し更に市港灣施設並私設埋立工事實現を見るに至らば、海陸連絡の圓滑を期し得るのである、然も函館港は洋の東西に地の利を占め、極東蘇國、新滿洲さては中華民國を控え、南北米の大陸に原料生産需要供給の所謂鍵鑰を掌握するものと稱して憚らないのである。加ふるに富の力は實に本道に冠たるは、事業家の等しく是認する所である。此等は、我が函館をして、國際的大工業地たらしむべき、可能性を最も雄辯に立證するものであると同時に、函館人が函館港に大工業を起すべく努力するを以て、天賦の義務と心得ねばならぬ、かくてこそ工業立市の結實を見るべきである。

五、勞務者需供

本市は、北海道の關門である許りでなく、東北及北陸方面とは津輕海峽を隔てゝ一葦帶水の接壤地帶であるが故に、勞務者の集散には最も好個の地位である、ましてや多年の水產都市として商權を掌握せる關係上、斯業の熟練勞務者需供には最も適してゐる。

昭和十三年當市經由北洋漁業勞務者數は總數三萬七千餘人に上り、皆日本側企業家の被雇者であつて、此等は等しく叙述の方面より本市に集合するのである。

次に當市沿岸漁業に對する入稼を見るに道內より約一千餘人道外より約一千五百人總計二千數百人に達するの現況である、而して此等勞務者は市內居住者の外、道內よりの入稼も相當多數に上り、殊に青森、秋田、新潟、富山、岩手、石川、山形の內地各縣よりの入稼者最も多く、福井、宮城、千葉、福島、東京の各府縣よりの入稼者も近來漸次增加の傾向を示して居る、今や本市は水產加工業を基本とする工場工業の機運熟し既に十數工場の設立を見、木材、製紙等の工場工業も具休化しつゝあるの秋、斯く優良なる勞務者の需要地を控ゆることはこれ亦本市の工業適應地たる側面的證左である。

六、動力需供

近代產業都市の發達には『動力の安價』を前提とすべきは論を俟たない、而して函館市の現在に於ては、此點餘りに惠まれてゐないのである、即ち水力にあれ火力にあれ油力にあれ其の動力は

共に他都市に比して決して安價ではない。

本市に於ける動力は主として、現在帝國電力株式會社に依つて供給されてゐるが、その料金は次表の如くである。

電力料金

一、定額料金（壹ケ月壹臺ニ付）

馬力別	晝間	夜間	晝夜間
半馬力	三円五〇〇	五円二五〇	八円七五〇
一馬力	六円〇〇〇	九円〇〇〇	一五円〇〇〇
二馬力	一二円〇〇〇	一八円〇〇〇	三〇円〇〇〇
三馬力	一八円〇〇〇	二七円〇〇〇	四五円〇〇〇
五馬力	三〇円〇〇〇	四五円〇〇〇	七五円〇〇〇
七馬力半	四一円二五〇	六一円八八〇	一〇三円一三〇
拾馬力	五五円〇〇〇	八二円五〇〇	一三七円五〇〇
拾五馬力	七五円〇〇〇	一一二円五〇〇	一八七円五〇〇
貳拾馬力	一〇〇円〇〇〇	一五〇円〇〇〇	二五〇円〇〇〇
貳拾五馬力	一二五円〇〇〇	一八七円五〇〇	三一二円五〇〇
参拾馬力	一五〇円〇〇〇	二二五円〇〇〇	三七五円〇〇〇
参拾五馬力	一七五円〇〇〇	二六二円五〇〇	四三七円五〇〇
四拾馬力	二〇〇円〇〇〇	三〇〇円〇〇〇	五〇〇円〇〇〇
五拾馬力	二五〇円〇〇〇	三七五円〇〇〇	六二五円〇〇〇

二、從量料金（一ケ月一キロワット時ニ付）

區分	晝間	晝夜間
五百キロワット時迄	五銭	七銭五厘
二千キロワット時迄	四銭五厘	六銭
五千キロワット時迄	四銭二厘	四銭二厘
七千キロワット時迄	三銭九厘	三銭九厘
七千キロワット時超	三銭五厘	三銭五厘

最低料金は二馬力迄は壹ケ月壹馬力に付『七拾七キロワット』時

但し二馬力を超ゆるものに付ては超過分一馬力に付六〇キロワット時を加ふることになつてゐる。

尙臨時又は不定時の電力使用の場合特定料金とすることゝなつてゐる。

電力會社の經營に係る發電所は其の地勢上道南地方には大河急流なき爲め現在は九ケ所に分散してゐるのである。

火力發電所を一考するに、元來函館市は、山元とは相當長距離にあるので運賃關係上、炭價は、噸當に就いて小樽より二圓二十錢室蘭よりは一圓六拾錢の高値にあるのである。

それで火力發電と謂ふことは炭價關係上、これ又割安を得て望み能はぬ狀態である、近時滿洲炭輸入問題及北鮮炭移入問題は根强く調査研究もせられ、燃料並動力解決に向つて邁進せられつゝある所以である。更に油力發電に至りては、唯研究中にあるばかりで、現在に於ては時局柄多く

の期待を得られない。

之を要するに、本市の動力問題解決の鍵關は市營か將又帝國電力株式會社の動力値下問題に外ならぬと思はれるのである。

七、經濟地帶

函館市の經濟地帶とは、本市商品の消流する所、商取引の圓滑に行はるゝ所、これ總て經濟地帶である。圖上の都市を焦点とし、假定的半徑を採りて一圓を書き、以てこれを商圈と爲し、或は舊說なる後背地帶てふ接續地陸產物の生產及消化狀態を卜して圓孤を畫き、以て商圈の廣狹を說くが如きも、商取引は假空事にあらずして、實在事である、市民の協商努力と商品の優良に且安價なれば、經濟地帶は伸張せらるべきであつて、現に本市の經濟地帶は獨り本道樺太及本州に限らるゝことなく南洋北米及歐洲方面に伸びつゝありて、中華民國並に滿洲國への進出は、これ又經濟地帶となるべきである。

ましてや交通運輸の便開け、陸送機關にあれ海上運送にあれ、利用すべき運輸機關の具備する秋に當り、單に陸接地帶のみを以て商圈と斷定するの要なく、否な海こそ開發すべく且つ利用すべきである。

第二章　水　產　業

一、基本產業は水產業である

本市產業の根幹を爲すものは、水產業であらねばならぬ、函館の景氣は『濱より來る』と謂はれてゐるが言簡なるも眞に穿ち得たる至言である。

即ち近海漁業の中心地であり、北洋漁業の策源地であり將又國際的海產市場たるの点に於て瞭かに表現せられて居る。

元來函館市の水產業即ち漁業は主として漁撈に主力を注ぎ、加工方法としては僅かに天日乾燥若くは鹽藏に限られたるの狀況であつた。

近時之が罐詰加工の勃興を見るに至り、鮭、鱒、鰯、鮪、烏賊等の如き大量漁獲品の罐詰加工と謂ひ、或は鰯の魚糧粉末又昆布粉末其の他加工品等は眞に本市の特異性を發揮するに至つたのである。

今本市工產品中水產加工品の狀勢を見るに左表の如く、また他品に比して著しく傑出せるものありと雖も、本港を中心とせる漁獲品の多量と企業家の熱誠に顧るとき、尙生產增加の累進亦期して待つべきものがある。

最近五ヶ年水產額

水産加工製品ト他工業製品 （職人五人以上工場調査ニ據ル）

種別	昭和十二年	昭和十一年	昭和十年	昭和九年	昭和八年
水産額	四、五八〇、〇四二円	四、五七〇、三三三円	三、八五七、三五八円	四、七五八、六三三円	五、九二一、四六四円

種別	昭和十二年	昭和十一年	昭和十年	昭和九年	昭和八年
水産加工品	三、三五〇、七二一円	三、三五九、三二一円	三、〇二四、九六一円	三、七四五、四〇一円	五、一八九、七〇四円
紡織工品	三、一一四、三三九	一、九九九、一九九	一、七八二、四八二	三五九、三〇三	一、一六五、三六三
金屬工品	三、三八二、六〇四	二、四三一、七九九	二、九六九、〇七七	三、三九三、七〇三	二、三一七、〇〇九
機械器具工品	七、二六九、五六七	五、〇三二、二九九	四、五四九、五五六	三、九七九、〇七七	三、七一八、三八三
窯業品	一二四、三〇〇	一二八、五三七	一二〇、三三〇	一三〇、三三〇	一三三、四五六
化學工品	六、九〇五、九五八	四、五五九、一一四	三、八七五、一一五	三、三三一、五八五	二、一三四、三三三
製材及木製品	二、七五〇、一七八	二、七八一、一六四	二、九〇〇、六六一	二、六九九、三四三	四、〇七三、九〇七
印刷及製本	七五四、五一二	七五〇、一四七	七一八、九七四	六三四、〇二三	八二二、三五六
食料品	五、八八三、四九五	四、九七五、〇三九	四、〇二五、五七〇	三、六八〇、一四三	四、四六一、三四六
瓦斯及電氣業	三六九、八七五	三六三、八九〇	三三三、六〇四	三一二、五七二	三三〇、〇二〇
其ノ他	二、〇七九、七六五	一、八三八、三三五	一、七二四、〇三六	一、〇〇六、四七八	一、五四五、六八三

二、水産市是と調査機關

本市水産に關する百年の大計を樹立すべく市長諮問機關として、臨時産業調査會を設け市內有力者を網羅して、調査研究せる水産市是の大要は左の通りである。

（イ）海峽漁業の改善及沖合漁業の奬勵

（一）漁港の築設

漁港には尠くとも左の設備を整ふることを要する

1. 漁獲物陸揚の棧橋又は岸壁
2. 漁船必要の物資積込の岸壁（休泊岸壁）
3. 岸壁に近接し背後に鐵道引込線を有する魚市場
4. 貯氷庫、冷藏庫
5. 漁船の船渠及修繕工場
6. 共同製造場
7. 簡易なる食堂、宿泊所、浴場、日用品賣場、新聞雜誌閲覽所、講堂、診療所、公益質屋、郵便局等の設けある水産會館
8. 小住宅及入稼業者の爲め『ビルデング』式住宅
9. 給水裝置
10. 給油裝置

（二）船入澗の改修並に增設（尙船入澗には給水及給油其他の設備を爲す）

（三）漁業地域の改善

（四）左の各項の徹底的奬勵

（イ）漁撈

1. 漁具及漁法の改良
2. 漁船の改良並動力付漁船の増加

（ロ）増殖

1. 有用水族の保護及増殖
2. 漁場の擴張

（ハ）利用

1. 製品の改良
2. 新製品の製出
3. 製品の食料化

（五）無線電信電話の利用を圖ること

（六）救護設備の完成

（七）試驗研究機關の設置並維持擴張

ロ、漁業策源地たる地位の確保及向上

左の施設を爲すこと

一、遠洋漁港の設置

二、農林省直轄水産試驗場の設置を期すること

三、遠洋漁業從事員の爲め家財倉庫を設け且つ傷害生命保險を附することを奬勵すること

ハ、水産貿易の振興

水産貿易の復興方策として市の採るべきもの

一、水産市場地域を劃し左の設備を完成すること

1. 岸壁
2. 鐵道引込線
3. 軌道の設けある水産倉庫
4. 上屋並共同荷揚場及乾燥場
5. 卸賣市場又は取引所
6. 車道特に自動車道
7. 問屋店舗

二、貿易を目的とする大財團を組織せしめ之を助成すること

三、販路擴張施設の周到を期すること

三、北洋漁業

北洋漁業とは、抑々何を指すのであるか、曰く世界三大漁場の一に數へられ、魚族無盡の寶庫と

して知られてゐる蘇國勘察加半島、沿海洲、薩哈嗹洲及樺太の各沿海に於て漁業に從事するを指稱するのである。函館が、今日北洋漁業の策源地として、名實共に誇りつゝある地位は、一朝一夕に築き上げられたものではなく、その沿革は實に血と汗との苦闘史であつて、その詳細はこの小冊に盡す能はざるを遺憾とするのである、眞に日露外交史はこれ北洋漁業外交史であるのである、從來北洋漁業は陸地を根據とせる漁業に限られてゐたのであるが、近來工船漁業の出現に依りて新生面を開くに至つた。

我が函館は、帝國對蘇漁業貿易總額の約八割を占め然も其の實勢力は、年と共に隆々たるの趨勢は決して一個の誇言ではないのである、乍而北洋漁業貿易の内容を詳細に點檢し、過去の狀勢と現況を考察する時、轉た今昔の感に堪へないものがある。

日蘇間北洋漁業に於ける兩國勢力の消長は左表の如くである。

函館經由日蘇出漁從業員表

（水上警察署調）

年次	露領漁業 企業者數	露領漁業 出稼者數	母船式蟹漁業 企業者數	母船式蟹漁業 出稼者數	母船式鮭鱒漁業 企業者數	母船式鮭鱒漁業 出稼者數	北千島漁業 企業者數	北千島漁業 出稼者數	魚糧工船漁業 企業者數	魚糧工船漁業 出稼者數	計 企業者數	計 出稼者數
昭和十三年	二	一八、五一四	一	二、四三三	一	一、二九〇	一三〇	一五、五九三	—	—	一三四	三七、八一九
昭和十二年	三	一九、四九九	一	二、七七七	一	二、〇六一	一六五	一四、八三三	一	四一〇	一七一	三九、五七〇
昭和十一年	三	二〇、八二一	一	二、六九一	一	二、〇五〇	九一	一一、五七五	一	三六七	九七	三七、五〇四

露領漁業日蘇兩國漁區變遷對照表

（日魯漁業會社調）

年次	國別	鮭鱒	蟹	合計
昭和十三年	日本側	三六九	一七	三八六
	蘇國側	三八二	二七	四〇九
昭和十二年	日本側	三七四	一七	三九一
	蘇國側	三九三	三一	四二四
昭和十一年	日本側	三八二	一七	三九九
	蘇國側	三九一	四一	四三二

函館經由日蘇北洋出漁船舶出入隻數及噸數調

（稅關年報）

年次	國別	隻數	噸數
昭和十三年	日本側	一八三	三五〇、七三九
	蘇國側	—	—
昭和十二年	日本側	二四三	三一一、五六三
	蘇國側	—	—
昭和十一年	日本側	二四八	三四〇、四〇一
	蘇國隻	—	—

露領漁業日蘇漁獲高表

（日魯漁業會社調）

國別	昭和十三年	昭和十二年	昭和十一年
邦人側水揚高	六二、三三七、七三四尾	七六、四六五、九〇六尾	六〇、一四五、五六七尾
蘇國側水揚高	不明	不明	不明

日蘇罐詰製造高品種別表

（日魯漁業會社調）

品別	昭和十三年 日本側	昭和十三年 蘇國側	昭和十二年 日本側	昭和十二年 蘇國側
紅鮭	四四〇、〇一五函	不明函	三三七、二七一函	不明函
鮭	｜		｜	
銀鮭	二六、六九八		八	
鱒	七二九、五三〇		七三五、〇五三	
鱒ノ助	二、二九〇		一、三〇〇	
其他	五、一二九		｜	
計	一、二〇三、六六二		一、〇七三、六三二	
蟹	七九、三三五		七八、七〇九	

之を要するに、函館市を根據とせる北洋貿易漁業經營並其貿易は、全く本港獨特の特異性を有するのみならず、眞に本邦に於ける產業上の誇りであらねばならぬ、日蘇兩國の出漁出發期並其終了引揚期に於ける函館港の雜踏殷賑は、實に筆舌に盡す能はぬ光景である、而して日蘇兩國に於ける、北洋漁業の角逐は、年と共に激化し、蘇國は嚴然たる我が漁業權益に對し事每に不法と暴擧の限りを盡しつゝあるは獨り本邦漁業家の損失なるのみならず、蘇國側も極度の疲弊に陷れる實狀にして、眞に遺憾に堪えない、之に鑑み本邦側漁業家亦一會社統制の下に、合同會社となりて、日魯漁業株式會社の傘下に入りて、愈々基礎を固めたるは函館港の北洋漁業の進展上喜ばしいことである。

乍而支那事變勃發以來、蘇國の壓迫其の極に達し、前途益々多難なる情勢にして如何なる不詳事を惹起するやも計り難く、之に對しては此の國家權益擁護の爲め、擧國一致斷乎として起つ覺悟の必要なることを切言するものである。

四、母船式漁業

母船式漁業は、在來工船漁業と呼ばれたものであるが、船舶内に漁撈並罐詰工場を設備して母体を爲すの外、直接漁撈に從事する多數の附屬漁船を具ひ、遠く北緯五十一度以北勘察加東西海岸公海は勿論のこと、米領アラスカのブリスト沖合までも進出し流網、巾着網及マワシ網並蟹網を沖合に張詰めて蟹、鮭、鱒等を漁獲し直ちに罐詰に製造するものゝ外、鰈及鰈等を漁撈し母船内にてフイツシユミールとする新興事業を總稱するのである。

本漁業も亦、其濫觴は本港にあるのである、即ち大正九年四月故和島貞二氏單獨蟹工船を案出着業せしに基因し、氏の冒險は幾度か死線をさまよひ且又財的苦難と戰ひ又昭和二年春故平出喜三郎氏は、所謂沖取漁業として、あの勘察加沖合公海に漁網を張りて、陸岸に群集する鮭鱒を漁獲せんとする企業を決行し、試練遂に効を見て物故せられたるも、今や此等の漁業は素晴らしい發

達を遂げ、近時漁業戰線の擴大と遡上濫獲の弊を叫ばるゝ事程左樣に新興國際的漁業の濫觴を爲し、本港の世界的水産都市の貫錄を累加した。

爾來四月上旬、蟹母船及鮭鱒母船參拾餘隻及附屬漁船たる獨航船參百數拾隻は一齊に、公海漁區を目指して、本港より出動するの光景並九月中旬漁期を終了して、歸航する賑殷なる實況は、本港ならでは見得られぬ光景である。

今近年に於ける母船式漁業の概況を見るに左表の通りである。

母船式鮭鱒漁業漁獲高表 （單位 尾）

年次	鮭	銀鮭	紅鮭	鱒ノ助	鱒	合計
昭和十三年	三、八五六、〇八五	二八、七九七	四、二六八、四三五	三、一三五	一、四八三、四七六	九、八二九、九〇八
昭和十二年	三、二八四、六五〇	三六二、五一〇	六、〇二一、三一一	一、六四五	一、九三一、一六九	一一、六〇一、二八五
昭和十一年	三、一四六、六六三	四〇〇、二七八	三、九四〇、四九四	一、五九九	一、三〇七、四五七	八、七九六、四九〇
昭和十年	二、九三六、三〇一	一六三、五三八	二、五〇二、二〇三	二、八四八	六、〇三三、八四一	一一、六一八、七三〇
昭和九年	二、六四八、九〇一	一七九、九九八	四、八六〇、〇七一	三、一八五	一、二五一、三四六	八、九四三、五〇一

母船式鮭鱒及蟹漁業罐詰製造高表

年次＼種別	鮭鱒 隻數	鮭鱒 製造高	蟹 隻數	蟹 製造高	計 隻數	計 製造高
昭和十三年	七	三三三、四九八函	八	二五三、六〇七函	一五	五七七、一〇五函
昭和十二年	七	四三五、七四一	八	二〇四、〇〇〇	一五	六三九、七四一
昭和十一年	六	二八六、一五七	八	一八四、三三六	一四	四七〇、四九三
昭和十年	八	三一八、一一四	八	一六九、一一一	一六	四八七、二二五
昭和九年	一九	二七三、七六六	八	一六三、〇九二	二七	四三五、八五八

母船式漁業も亦對内的に事業統制と、對外的に販賣統制の機運に迫られ、曩に蟹母船式漁業は、日本水産株式會社の單一社となり、鮭鱒母船式漁業も又太平洋漁業株式會社の下に合同を見、而して此の二大會社は何れも本港を根據としてゐるのである。

五、北千島漁業

北千島漁業は、北海道千島列島の終端にある占守、幌筵、阿頼度、鳥島、志林規、五島を根據地として、北緯五十一度以南の廣大なる漁區に於て千餘隻の漁船は、各々漁を網を張詰め鮭鱒魚道を遮つて流網式により漁獲し、之を陸上罐詰工場に運搬して、製品と爲すの企業であるが、昭和八年以來一躍世人の關心を喚起し、今や日蘇兩國間にありて動もすれば漁業上紛爭を惹起しつゝある折柄、邦土に於て安んじて事業を經營せられ而も生産額年と共に增進し約四千數百萬圓に垂んとする事業に進展し、これ亦本港を物資集散市場とするは强味である。

而して曩に流網漁業は北千島合同株式會社に、定置漁業は北洋漁業株式會社の下に夫々統制合同を見、益々本漁業の地位を强化するに到つたことは喜びに堪へぬ所である。

近年の北千島鮭鱒漁業の實績を示すと左の通りである。

北千島鮭鱒漁業漁獲高及罐詰製造高表

年次＼種別	漁獲高（單位尾） 鮭	紅鮭	銀鮭	鱒	鱒ノ助	計	罐詰製造高 鮭鱒（函）	蟹（函）
昭和十三年	一五、九六二、二九九	五、四一三、九六一	一、三二一、三二八	五九、九七六、二六四	二五、七三三	八二、六八九、四八五	五三四、九九九	六三、三三九
昭和十二年	一四、一一四、九九三	四、四九七、七一三	一、七三九、九三〇	六三、九八一、六〇八	三〇、九二五	八四、三六五、一六八	六〇六、五三八	五四、六三六
昭和十一年	一五、三九四、二六三	三、〇二〇、二九六	二、四〇四、九一五	三一、〇三八、三三九	四〇、六八九	五一、八九八、五〇二	五三九、七〇九	三六、五〇二
昭和十年	五、六三二、五六三	九四八、五一八	八四四、四六三	二八、〇一八、二一八	一六、七五四	三五、四六〇、五一六	四一九、七七〇	一六、五一三

六、沿岸漁業

本市は、太平洋に突出し津輕海峽を挾みて、日本海に相通し、而も暖流及寒流に洗はるゝを以て魚族亦四季を通して豐富である。

回顧すれば、鰊群集の黄金時代は昔の夢と去つたが、柔魚漁撈及鰮漁撈は、眞に本市水產界の二大產物となつたのである、殊に津輕海峽沖合に、無數の柔魚漁船は燈火を点して出漁するの光景は、宛から夜間海上に市街を急造せるやの感を深くし、函館名物の一つである、而して鰮漁獲高に至つては隣接漁村を合すれば、優に全道總產額の約七割を占むるの盛況である、之に次ぐは鮪漁であるが其の他雜魚としては鰈、鯛、鱈、鯖等枚擧に遑がないのである。

今最近の統計を示すと左の通りである。

沿岸漁業漁撈者數

種別	昭和十三年 業主	被用者	計	昭和十二年 業主	被用者	計	昭和十一年 業主	被用者	計
本業	七四七	一、六一五	二、三六二	七二二	一、八四七	二、五六九	六三五	一、六八四	二、三一九
副業	五	一五	二〇	一〇	一二	二二	—	—	—
計	七五二	一、六三〇	二、三八二	七三二	一、八五九	二、五九一	六三五	一、六八四	二、三一九

漁業免許現在數

年次	地方專用漁業權	特別漁業權（鰮）	區劃漁業	柔魚定置	鰮定置	鯡定置	鰤定置	計
昭和十三年	三	一二	一	三〇	三二	五	—	八二
昭和十二年	三	一三	一	二九	三二	五	一	八四
昭和十一年	三	一三	一	三一	三四	二	一	八五
昭和十年	三	一三	一	三〇	三九	一	一	八八
昭和九年	三	一三	—	三〇	三八	一	一	八七

漁業許可現在數

年次	柔魚	鰮、鰈	機船底曳	其他	計

昭和十三年	二三六	六三	二五	一六	七〇	四〇〇
昭和十二年	二一	三〇	二九	一六	五	一〇一
昭和十一年	二一	二八	三〇	一六	五	一〇〇
昭和十年	一五一	四〇	三〇	一七	一六	二五四
昭和九年	一四二	四一	三二	一七	一六	二四八

沿岸漁獲高

年次	漁獲高 數量	漁獲高 價額
昭和十三年	三、六六四、七八六貫	一、八二七、三九〇圓
昭和十二年	三、〇三六、五三二	一、〇七五、〇一三
昭和十一年	二、七八四、二三五	九八五、〇二八
昭和十年	二、一一〇、一一六	七〇七、四八三
昭和九年	四、五三二、八〇〇	九二三、四三七

七、淺海漁業

函館市は、函館山麓に市街を形成し、而も漁業を生業とする漁民は、孰れも山麓の海濱に住居し住吉町、山背泊町は純漁業家の集團であつて、大森町及海岸町方面は之に亞ぐ、元來函館山は、火山岩より成るを以て海濱一帶は、岩盤である故に、天然的に介藻は、密生するのである。

現在に於ては各町漁業組合は各々海面を占有して專用漁業權を獲得し、其の生產品の主なるものは、海藻中の覇王と稱すべき昆布で、內外市場の稱讚を博してゐる、從つて各漁業組合は、年々昆布礁の養成の爲め、海中適當の個所に繁茂に適する岩石を投中して、其の增殖を計つてゐるのである、其の他石花菜、和布、海苔等の產額も亦尠なくない。

貝類の產額として、僅かに鮑、赤貝等を數ふるも、昭和四年駒ヶ嶽爆發に際し、噴出岩は當市沿岸一帶に流漂し來り、著しく此等貝類の繁殖を防げ、近年漸く恢復の曙光を見つゝあるも、尙產額は激減せる狀態である。

其の他港內にも又赤貝を產する外、カキ養殖に努めたるも効果擧らず、アサリ貝の產額又相當の額にありしも、近年港內埋立工事並濫獲に災せられて、今は僅かに子女の採取に享樂せらるゝのみである。

淺海漁獲物表

種別	昭和十三年 數量	昭和十三年 價額	昭和十二年 數量	昭和十二年 價額	昭和十一年 數量	昭和十一年 價額
貝類	二九、五八三貫	五六、三四九圓	二八、五六八貫	四九、四一四圓	一二五、九八四貫	一六三、八六〇圓
藻類	三〇、二四〇	九、〇三三	三〇一、三四一	六九、四一八	一〇八、九五六	二八、五八三
計	五九、八二三	六五、三八二	三二九、九〇九	一一八、八三二	二三四、九四〇	一九二、四四三

八、水產加工業の現在と其の將來

本市に於ける水產業の現況を見るに、從來主として、漁撈多產に依る水產都市たる地位は、過去

の時代である、本市は、須く北洋漁業に、沿岸漁業に、將又淺海漁業に、豐富なる魚族を利用して、技術的に水產加工業に一路進出せねばならぬ、眞に函館市繁榮の基調は、水產加工業の勃興と之が製品の販路を廣く對內に對外に伸張を策するの道であらねばならぬ。

今本市に於ける水產製造物を大別すれば昆布、鯣、鯡等の素乾の百二十一萬圓を筆頭に、鰯其他の罐詰類の百十四萬圓之に次ぎ、フイツシユミール及魚粕肥料、九十二萬圓、柔魚、鹽辛、蒲鉾類六十八萬圓、鰯、鮫、鱈類の魚油二十七萬圓等が主要なるものである。

敍述の如く、本市の水產製造は未だ天日乾燥若くは幼稚なる加工を主とする生產品にして、技術的加工品の產額僅少なるは全く意外とするところである。

市は之が爲め、曩には北海道廳水產試驗場函館支場の設置を要望して旣に實現を見たる外、市に水產技師を常置して當業者の指導助成に當らしめ、高等水產專門學校も昭和十年度に開校せられた事は、水產加工業の研究助成の爲め、大いに意を强くするに足る可く、尙民間に於いても製罐工場を始め、冷凍船、冷藏倉庫、罐詰工場又は魚糧工場、油脂工場等逐年增設せらるゝを見るは欣快とする所である。

殊に最近の研究に係る新興商品たるフイツシユミール、トマトサージン、粉末昆布又は諸罐詰類等の海外輸出漸次勃興を來たし南洋又は獨佛英米等の諸國に於て益々聲價を高めつゝあるは洵に同慶である。

斯く今や本市は、全力を擧げて水產加工の進展を策する狀態にして、今後益々水產都市たるの面目を一新すべきや言を俟たない所である。

水產品製造業者

種別	昭和十三年 業主	昭和十三年 被用者	昭和十三年 計	昭和十二年 業主	昭和十二年 被用者	昭和十二年 計	昭和十一年 業主	昭和十一年 被用者	昭和十一年 計
本業	九一	六三一	七二二	九四	八六一	九五五	九七	八一〇	九〇七
副業	—	—	—	二	—	二	三	三四三	三四六
計	九一	六三一	七二二	九六	八六一	九五七	一〇〇	一、一五三	一、二五三

水產製造物表

種別	昭和十三年 數量（貫）	昭和十三年 價額（圓）	昭和十二年 數量（貫）	昭和十二年 價額（圓）	昭和十一年 數量（貫）	昭和十一年 價額（圓）
素乾	三四六、九二五	一、一七七、九二八	四二一、九八二	一、三二一、九〇九	五三五、七六八	一、三一五、三一四
鹽乾	八、一二〇	六、三〇〇	九、八三〇	五、八九三	一八、三四〇	一五、五八九
煮乾	九九二	一四、一三〇	三、五六八	三五、五〇八	二、三五四	九、八八八
燻製	七、七〇〇	四三、五三〇	九、一〇〇	三一、〇四七	八、三五四	二八、六三六
鹽藏	三四、〇〇〇	四一、三〇〇	五五、四五〇	七九、八五〇	三七、〇二〇	六六、五五九
酢漬	—	—	二、三七三	三、〇八五	一、二五〇	一、五〇〇
節類	四、八〇〇	九、七五〇	—	—	—	—
其他食料品	九五一、〇六〇	一、三二八、五五〇	四五一、三七六	六八六、一三四	四〇七、六九〇	一、五三三、八七一
肥料	九九六、三八四	四六三、九八八	二、一三一、〇八三	九三七、一〇九	三、〇七八、一八〇	一、一一六、八五三
魚油	二八一、五四一	三三四、三七三	三三六、七四〇	三七一、五八九	三六三、三二五	二六六、七〇五
罐詰	四〇四、四七一	四九九、六三三	九四九、六一五	一、一四八、六一七	七八四、五四六	九三六、五四〇

計	三、〇三五、九九三	三、七〇八、三六二	四、三六一、〇〇七	四、三九〇、七三四	五、三三五、七三五	四、二九〇、四四九

第三章　工業

一、工業の現在と其の將來

本市開發の企業は、漁業であり昔日に於ては魚族豐富にして、一攫千金の利得ありしを以て、營々と着實に營む工場工業は、兎角等閑に附せられた感があるのである、然し造船業のみは居留地關係上居住外人の指導等により特段の發達を見たのであつた。爾來七十有餘星霜、港灣都市、水產都市としての長足の進步は、之に附隨する各種工業の勃興を促したのである。

之が代表的工場の五六を屈指するならば、函館船渠株式會社、日產化學工業株式會社函館工場、日本製䌫株式會社工場、北海道護謨工業株式會社工場、日本油脂會社工場、函館製網船具株式會社工場、函館罐詰製造工場、明治製菓株式會社函館工場、松下毛皮製革工場、其他讓造水產加工工場がある、其の生產總額は四千二百四十八万餘圓にして工、水、畜、農の各種生產額中第一位を占め近年一般財界不况に不拘年々增加の狀勢にあるのである。

工業總生產額

年次	生產額	工場數	職工數
昭和十二年	四二、四八一、五五八圓	二、七二三	一一、〇九二
昭和十一年	三三、三三一、五五三	二、七四六	九、五一〇
昭和十年	三一、六四一、六四七	二、七一七	八、八二五
昭和九年	三〇、三九七、〇五四	二、七二六	七、九六三
昭和八年	三二、五三二、八七一	二、六九七	七、六四五

斯くて本市の工業は過去より現在に躍進しつゝありて、之を將來に察するに尙前途洋々たるを痛感するのである。

即ち本市は、前述の如く工場工業に好應する龜田平坦の臨港地帶が、千三百二十二万平方米に餘り廣大なる自然地積に惠まれてゐるのみならず、勞務者の需要至便であり、且企業熱旺んで資金を抱擁する多數の資本家を有する本市が、眞に工業地としての强味であるのである、ましてや港灣は對外的に世界通商路を占め、對內的には本道及本州間の關門で搬出入路として、充分天惠を專にしてゐるのである。

而して工業誘致並振興を策するには、現在工業生產總價額の二十二%を占むる機械器具工業、二十一%占むる化學工業、十八%を占むる食料品工業又は製材及木製品工業等に對し助長發達を策勵すると共に、將來發達の見込みある工業例へば製紙工業製油工業其の他代用品工業等に對し市

當局は誠意を披攊し市民亦充分理解の下に企業誘致に努めねばならぬ。

二、工業市是と調査機關

當市百年の大計として確固不抜の雄計盤たる工業市是は、衆智に基づき組織せられたる當市臨時産業調査會に於て左の通り確立せられてゐる。

イ、土地動力及燃料の廉價供給を策すること

その對策として

(一) 工場地域を劃し區劃整理を遂げ其の地域又は最寄に左の設備を完成すること

(1) 運河　(2) 道路　(3) 鐵道引込線　(4) 石炭積卸
(5) 貯炭場　(6) 貯木場　(7) 起重機　(8) 上屋及倉庫
(9) 給水及排水　(10) 岸壁

港灣調査會に於て決議若くは希望したる工業地域を揭ぐれば左の如し

1 第一防砂堤及第二防砂堤間を第一工業地域とす。
2 第二防砂堤より久根別に至る間を第二工業地域とす。

(二) 工業地域の地主會又は適當なる財團を組織せしめて好意的に工場用地を提供せしむること

(三) 動力の供給を廉價に且つ容易ならしむること

(四) 本道主要工業都市の炭價を平均ならしむる方策を講ずること

ロ、現在工業の振興を助長發達せしむることとその對策左の如し

(一) 市營の特殊倉庫を設くること
(二) 木材工藝材料貯水池乾燥場の設置
(三) ビルヂング式貸工場の建設
(四) 本市の重要製品に對し檢査を勵行し及び保護奬勵をなすこと
(五) 各種工業の試驗研究機關を設くること
(六) 市に工業技師を置き中小工業の指導の周到を期すること
(七) 發明事業を助成すること
(八) 販路擴張施設を助成し其の徹底を期すること

その具體的方法を例示すれば

1. 生産品陳列所の設置
2. 巡回見本市の開催
3. 博覽會の出品
4. 物産案内の刊行
5. 販路調査
6. 當業者の内外視察

ハ、工場工業の誘致

(一) 工場地域内に於ける新工場に對し一定の期間市税を免除すること

(二)私設保税工場の設置奬勵

(三)經濟圏内に於ける工業資源及工産品販路狀況を調査し之が周知を圖ること

(四)パンフレットを刊行すること

(五)博覽會等に於て工業經營上の特長を展示宣傳すること

尚本市は産業上の重要事項を審議し、生産擴充に資するがため、市制に基き生産擴充審議委員規程を設け、委員會は市會議員十五名、市公民十名を以て組織してゐる。

三、中小工業の指導助長施設

本市繁榮の基調は、商工業の興隆にあるを以て工場工業機械工業の誘致奬勵に努むると共に中小工業の指導助長も亦等閑に附すべからざるを刻下の急務としてゐる。之れ本市に於ける工業は嘗に中小工業の發達に俟つべき要素を多分に包含してゐるからである。

本市は、此等當業者に資金融通の對策としては、政府産業資金借入に對する諸條件の緩和によりて、極力斡旋に努むる外、産業組合組織によりて低利資金の融通に、助力に、其他市内中小工業團体を配合して、工業組合を組織せしめ其結成せるもの左の通りである。

工業組合

組合名	事務所所在地
北海道鱈罐詰工業組合	松川町三二
函館ゴム工業組合	鶴岡町五〇
函館建具工業組合	旭町四
函館印刷工業組合	旭町一四二
函館鐵工機械工業組合	眞砂町二
函館紙器工業組合	寶町一
函館家具工業組合	音羽町六
函館竹籠工業組合	東濱町二五
函館フィッシュミール工業組合	船場町三
函館鐵製品工業組合	寶町三四
函館木造船工業組合	音羽町八
北海道漁網工業組合	末廣町八四
函館柔魚釣針工業組合	鶴岡町二五
函館地方馬具工業組合	若松町七
函館地方靴工業組合	寶町三〇

而して販賣方面に對する施設としては、函館市物産協會を組織して販路擴張、販賣斡旋を爲すの外、各地博覽會及展覧會に出品し、或は見本市開催等によりて、本市生産品の宣傳を行ひつゝあるのである。尚工藝品の改善に資するため工藝協會を創立し、又帝國發明協會北海道支部函館分會の設立を見た。

其他産業助長の見地に基き、函館市産業奬勵規程を設定し、産業功勞者を表彰すると共に、産業に資すべき器具機械の發明者を推賞することになつてゐる。

市長は例年明治節の佳辰に當り是等の人々を表彰するは、函館市の誇であると共に、産業上の一

光彩である。

四、工業營業別情勢

本市が水産都市として北洋漁業の策源地たる特色は、又工業にも反映せるを見る。

今職工五人以上の工場工業の情勢を見るに、近年急速なる發達を辿れる造船其他の機械器具工業は、工場總生産額中五分の二以上を占め、生産額七百二十餘万圓に上り、之に次ぐものは鰯油脂製造其の他化學工業の六百九十万圓と水産加工品を主とする食料品工業の五百八十餘万圓で之等は總生産額中夫々約五分の一を占め、逐年顯著なる進展を示しつゝあることは特に注目に値する

尚諸罐詰用製罐を中心とする金屬工業と漁網製造其の他の紡織工業は夫々六十万圓を突破する有様であり、漁場行の桶樽木箱等の材料製作を含む製材及木製品工業は三百七十餘万圓に達し、漁業の進歩と共に前途洋々たるものがある。

之に次ぐは印刷及製本工業の七十餘万圓瓦斯及電氣工業の約四十万圓、窯業の十數万圓等で其の他工業生産額は約三百万圓にして、工業總生産額は年々異狀なる増加を示しつゝあるは本市の工業適應性を如實に物語るものである。

工業營業別表 （職工五人以上ノモノ）

種別	昭和十二年生産額	昭和十一年生産額	昭和十年生産額
紡織工業	三、一一四、二三九	一、九九九、一九九	一、七八二、四八二
金屬工業	三、三八二、六〇四	二、四三一、七九九	二、九六九、〇七七
機械器具工業	七、二六九、五六七	五、〇三二、二九九	四、五四九、五五六
窯業	一二四、三〇〇	一二八、五三七	一二〇、三八〇
化學工業	六、九〇五、九五八	四、五五九、一一四	三、八七五、一一五
製材及木製品工業	二、七五〇、一七八	二、七八一、一六四	二、九〇〇、六六一
印刷及製本業	七五四、五一二	七五〇、一四七	七一八、九七四
食料品工業	五、八八三、四九五	四、九七五、〇三九	四、〇二五、五七〇
瓦斯及電氣工業	三六九、八七五	三六三、八九〇	三二三、六〇四
其ノ他工業	二、〇七九、七六五	一、八三八、二三五	一、七二四、〇三六
計	三二、六三四、四九八	二四、八五九、四二三	二三、九八九、四五五

第四章　貿易

一、貿易の現在と其の將來

由來函館港の貿易は、仲繼市場を骨子としたのである、概言すれば北洋漁業に、樺太漁業に、千島漁業に、將又沿海漁業に、孰れも其の生産品が函館市場に集散せられ、軈て對內取引と爲り、對外輸出の盛況を招いたのである。

然りと雖も、仲繼貿易港の殷盛の歷史は港史に見ることが少ないのである。仲繼貿易港たる我が函館港も、必ずや加工製造貿易港に躍進せねばならぬのである、而も水産品加工業は其の基本たるのみならず、極東蘇國の木材、北滿に於ける木材、大豆等、隣接地帶に斯く原料豐富にして、

其製品需用、亦對内に對外に欲求せられつゝある狀勢である、之を我に利用するは敢て難事ではないのである。

乃ち天與の好位置と、我函館の實力の、實際化とに據り、仲繼貿易より蟬脫して、一躍加工貿易として、將來益々囑望するに足るのである。

主要貿易品

（函館商工會議所調）單位千圓

種別	移輸出入別	昭和十二年 外國	昭和十二年 內國	昭和十二年 計	昭和十一年	昭和十年	昭和九年	昭和八年
工業品	入價額	二、九二四	一七七、五五三	一八〇、四七七	一五四、五九五	一五四、二九五	一五六、三九三	一二九、九九一
	出價額	六、二八八	八三、四一一	八九、六九九	一〇七、八三四	八六、二四八	九〇、三五六	八一、一二六
水產品	入價額	一三、九三四	四五、一六九	五九、一〇三	三三、九四四	三三、三四七	三三、三九一	二七、三七八
	出價額	三三、八四一	八七、七六五	一二〇、六〇六	六五、七三四	六八、九九三	六九、八二九	五七、九九四
農產品	入價額	三八四	二四、五〇九	二四、八九三	二六、八三六	二五、四六六	三、〇六七	一九、六八六
	出價額	八二一	一三、三八二	一三、一九三	八、五三三	七、九二〇	六、六二三	六、七六二
林產品	入價額	二五	五、〇〇九	五、〇三四	四、五三七	四、八四四	九、四四四	二、五〇四
	出價額	八四一	六、四六九	七、三一〇	六、一二一	五、二一〇	四、四四六	三、七六六
鑛產品	入價額	九四八	七、一二九	八、〇七七	五、七九八	五、八九八	四、八〇三	六、〇九〇
	出價額	八一四	六、七二三	七、五三七	五、九五五	六、〇八六	六、五七七	六、五一三
畜產品	入價額	一三三	一、九六九	二、〇九一	一、七三五	二、三三七	一、八三九	一、六七七
	出價額	一二四	一三、二六一	一三、二八五	六、三七五	五、八三九	一、九六九	六、〇六三
雜品	入價額	三九八	八八、六三七	八九、〇三五	七〇、八〇九	一七一、〇三七	六一、七六一	五三、八九〇
	出價額	八九二	四一、八八三	四二、七七五	三一、七四九	二七、八七六	二〇、八三九	二九、三四九
計	入價額	一八、七三五	三四九、九七五	三六八、七一〇	二九九、二五四	三九七、一二四	二八八、六九七	二四一、二一六
	出價額	四二、五一一	二五〇、八九四	二九三、四〇五	二三三、二九一	二〇八、一七二	二〇〇、六三八	一八一、五七二

備考　道內鐵道便ヲ除ク

二、市貿易通信網

對外的商權進展の第一階梯は、市場調査である、然も斯業實驗家の調査研究は、商權の先驅を爲すは、古今を問はず、洋の東西を論ぜず其軌を一にするは靑史の示す所である。

本市は、海產仲繼市場より、一步製造加工市場への進展には、其製品の販路調査は急務であるのである、故に本市は財政多端の折にも不拘、本市生產品の趣好及賣行等を考察して、各地に貿易通信員を配置して、商報を蒐集すべく、差當り左記數個所に貿易通信員を囑託し、然も其囑託員は其地の事情に精通し、尙斯業の實驗者に委囑して、彼地の商況及取引事情を通信せしむ、市は大体之に據りて見本品試賣等を行ひ、其の成績に鑑みて當業者をして實際商取引を行はしむ、今本市貿易通信員所在地を示すと左の如し。

北海道廳上海貿易調査所

上海に在り最初本市にて設置せるものなるも其後北海道廳に移管せり。

北米羅府市貿易調査囑託員

佛領印度支那西貢市貿易調査囑託員
比律賓マニラ市貿易調査囑託員
ジャバ島バタビヤ市貿易調査囑託員
南米ヴエノスアイレス市貿易調査囑託員
北海道廳大連貿易調査所
朝鮮清津貿易調査囑託員
北海道廳香港貿易調査所
北海道廳哈爾濱貿易調査所
北海道廳天津貿易調査所
北海道廳新嘉坡貿易調査所
北海道海産物輸出組合函館支部天津派遣員
貿易調査囑託員新設豫定地
北京、青島　バンコック

三、漁業貿易は特徴である

函館市は水産都市である、而も帝國北方に於ける重要意義ある國際水産都市である、國際水産都市即ち北洋漁業貿易は、本市の特徴であるのである、故に貿易の消長は又漁業の豐凶に懸つてゐる。

本港は眞に北洋漁業經營及貿易の策源地である、これは獨り本市の誇りなるのみならず實に帝國々策上よりするも、年々數千萬圓の富を齎す所の偉大なる事業である。

回顧すれば、本市北洋漁業貿易の歴史は甚だ古い、貿易の變遷及事業の曲折を筆するときは、之れ全編函館港の對露外交であらねばならぬ。

爾來、日露間の漁業經營並貿易に關する交渉は、愈々滋く、幾多の波瀾を經たが、そは到底簡單に綴られない。

千九百七年ポーツマス條約に依り日露漁業條約の締結を見るに至りて、始めて邦人漁業權確立するの一新紀元を劃せるも、これ我國家の興亡を賭した一大犧牲であつて、幾十万同胞の血と骨との代償とした、高價嚴粛なる露領漁業權其の物であつた。

歐洲大戰當時、露國革命の內亂に災せられ、露領漁業貿易は一時危懼せられたるも、斷然自治的出漁の壯擧を決行し、克く既得の權益を保持したのであり、降りてソヴエート社會主義聯邦國成立後に至りて其の政体及經濟組織の異なるものありと雖も、漁業條約基本には變化はないのである。

然りと雖も、之が運用に關しては、兩國間に不尠阻誤の点を生じ、其の漁業經營上蹉跌なきにあらざるも、本港の地位は依然として、確固たるものがある。

而して、本邦無比の策源地として、名實共に商覇を掌握しつゝあるは、函館市民の先輩が後人の想像だに及ばない勇敢にして冒險的なる事業經營と、其努力の結果であつて眞に血と汗との賜である事を忘れてはならぬ。

斯る光輝ある本港漁業貿易は、本邦總額の約八割を占め輸出にあれ將又輸入にあれ巍然として頭角を顯はしてゐるのである。

尚最近の統計を示すと左の通りとなつてゐる。

最近四ケ年外國普通貿易

（函館稅關調）

年次	輸出	輸入	計
昭和十三年	三六、七七三、六七四	四、七〇七、七二〇	四一、四八一、三九四
昭和十二年	三三、五〇七、九一四	二、六五〇、六〇五	三六、一五八、五一九
昭和十一年	三五、〇六五、九二四	二、三四八、一七四	三七、四一四、〇九八
昭和十年	二三、九九五、〇五二	二、〇四〇、九七二	二六、〇三六、〇二四

同漁業貿易

（函館稅關調）

年次	輸出	輸入	計
昭和十三年	六、五二八、二二二	一六、九一九、六一二	二三、四四七、八三四
昭和十二年	五、八六一、一四九	一五、一六二、六一一	二一、〇二三、七六〇
昭和十一年	六、〇三六、九四二	一五、二二六、六五一	二一、二六三、五九三

四、蘇國々營貿易の槪觀

本市に於ける、北洋漁業の地位並に漁業貿易の現狀を正しく認識するには、一面ソ國々營漁業貿易の情勢を理解することが必要である。何となれば最も密接なる關係を有するからである。現在のソ國が革命を遂行する以前、即ち帝政時代に在りては北洋漁業は邦人が活躍を續けたるの觀があつたが、一度革命が成就するや、ソ國は銳意極東政策に力を注ぎ所謂漁業五ケ年計劃は樹立して、漁場の開發、或は工船漁業の進出となり、旣述の如くソ國漁業の進出は近來殊に目覺しいものである、而して國營及消費組合の營む各漁場及工船等の物資の仕込、漁夫の送り込みには船舶を浦鹽より本港に回航して、通商局支部の手に依つて、大半本市に仰いだのである。然るにソ國の自給自足主義は、著しく本港の需要を節減し、曾ては漁業用品の買付のみ五百萬圓を突破せりと稱せられたるも、昭和十三年には僅かに約二十七万圓台に下り更に、漁獲物の輸入は皆無の狀況である。

而してソ國側の輸入低減の傾向あるは、主として自國領圈たる浦鹽に陸揚し、歐亞並北滿等に販路を擴張しつゝあるが爲めである、玆に注意すべきは英、獨、佛、中華等の各國市場に於て、本邦品の聲價を高めつゝあるに乘じ、近時ソ國品は、亦之等市場に於てダンピングあるやの商況にあり、又相互競爭的商況を展示しつゝある狀勢であり、斯の如きは價額統制上遺憾とする所である。

斯の如くソ國の漁業政策は漸次本港に反響しつゝあるは本市の經濟上洵に注目すべき事である。

今函館港に於ける日ソ兩國の漁業貿易の狀況を參考に供すれば次の如くである。

漁業貿易表（輸出）（函館稅關調）

品名	昭和十三年 日本側	昭和十三年 ソ國側	昭和十二年 日本側	昭和十二年 ソ國側	昭和十一年 日本側	昭和十一年 ソ國側
	圓	圓	圓	圓	圓	圓
白米	五三九、一六五	—	五〇九、四三三	—	五一九、七九七	—
食鹽	四、七六九	—	一、七七四	—	五、〇一三	—
其ノ他飲食物	一九一、三六〇	—	一九三、八一四	—	一九一、二四七	—
漁網	一、六三三、〇三一	—	一、六二七、七三一	—	一、三八九、二四九	—
絲縷縄索類	六〇六、六九七	—	四四八、五六六	—	三四六、八一六	—
石炭	二六七、五五四	—	一〇五、六三六	—	五八、二四六	—
罐詰用空罐	三〇、三六三	—	二〇、八九五	—	二九六	—
其他金屬	二六九、六五六	—	三三一、一二一	—	—	—
船舶	五〇五、〇〇五	二七三、六〇三	四三三、〇二〇	三七〇、〇〇〇	四八八、八二七	五六二、八五六
機械類	三三〇、三二八	—	四四五、一九一	五、〇八〇	五三七、二六五	七七、三五〇
木材及木製品	一、〇五五、八九八	—	八八七、四八一	二〇〇	一、一一九、九八〇	—
藥製品	一七〇、六八六	—	一五八、三四五	—	一六一、四七九	—
布綿衣類	一四五、〇六八	—	一一七、六六八	—	九八、九八六	—
其ノ他	六〇七、三三三	—	六九〇、三三五	—	九一九、七四一	—
再輸出品	八七一	—	一八九	—	—	—
計	六、五三八、三三三	二七六、六〇三	五、八六二、一四九	三七五、二八〇	六、〇三六、九四三	六四〇、二〇六
合計	六、八〇四、八三五		六、二三六、四二九		六、六七七、一四八	

漁業貿易表（輸入）函館稅關調

品名	昭和十三年 日本側	昭和十三年 ソ國側	昭和十二年 日本側	昭和十二年 ソ國側	昭和十一年 日本側	昭和十一年 ソ國側
	圓	圓	圓	圓	圓	圓
鮮魚	一、一六二、一六四	—	七一〇、九三二	—	三七五、六〇六	—
鹽鮭	四、六五四、一一四	—	三、一九四、六五三	—	五、六八三、七七六	—
鹽鱒	二、〇〇三、一一五	—	三、四九二、六二九	—	一、四七九、二五三	—
其他鹹魚	一九三、一三六	—	一八五、一九一	—	八六五、六三九	—
鮭罐詰	一、六八〇、二七三	—	七八五、八〇二	—	二、四七四、〇八二	—
鱒罐詰	二、四〇二、七八六	—	二、四七六、二三四	—	一、三〇四、三八九	—
蟹罐詰	一、三三三、一七九	—	九一三、八六〇	—	四三八、四九八	—
筋子	一、八一六、二五〇	—	一、九八五、九九七	—	一、九三三、六四九	—
魚肥	八六六、三六八	—	一五四、三三八	—	七七、七六六	—
其ノ他	三五、四四七	—	三一、三六八	—	五四、二六三	—
再輸入品	一、五七三、六九〇	—	一、三三一、八三七	—	一、三三〇、八三三	—
計	一六、九一九、六一二	—	一五、一六二、六一二	—	一五、三三六、六五一	—
合計	一六、九一九、六一二		一五、一六二、六一二		一五、三三六、六五一	

五、貿易上より見たる顧客

本港よりの輸出品は、既述の如く本市の特色に反せず漁業用物資及水産品が、其の大半を占め世界各國至らざるなき狀態である。

漁業用物資の大部分は船舶及機械類、罐詰用罐、又は鐵製品等の金屬製品、漁網帆等の布帛類箱板樽板木材類、又は麻繩麻絲等の綿繩類、等で露領輸出である。

水產物の輸出は古き通商の歷史を有する中華民國が、從來第一位を占めてゐたのであるが、近時事變の影響を蒙り一時輸出は不振ならざるを得なかつた、而し治安工作の進展と共に漸次恢復の傾向を示してゐる、殊に滿洲國及中華民國諸新政權の出現と共に一段と貿易上新境地を得たるは獨り本市としてのみならず、古來密接不可離の關係に於かれてゐる三國間の交易上洵に祝福すべきである。

尙水產物の輸出は英、佛、米、獨の諸國は最も多く濠洲にも年々相當の輸出を見てゐるのであるが近來本市の水產製造物の硏究及奬勵と、見本市其の他の宣傳と相俟つて米國及フイリツピン並南洋諸島等の主要都市に向つてフイツシユミール、オイルサージン、トマトサージン、又は諸罐詰等の輸出が日に月に增加しつゝあるは甚だ快心の至りである。

今是等諸國との取引狀況を示せば次表の如くである。

國別貿易額表

（函館稅關調）

國別	輸出額 昭和十三年	輸出額 昭和十二年	輸出額 昭和十一年	輸入額 昭和十三年	輸入額 昭和十二年	輸入額 昭和十一年
中華民國	一、一六九、二三五	七三三、〇九三	二、五八〇、〇二三	一七、七〇九	二、〇二三	一三、一六四
滿洲國	六四四、二五〇	二〇八、二〇一	五四、五八九	二五四、二四七	三〇四、六九八	一一四、八七三
關東州	二、九七三、〇三三	三、五六五、二五三	一、四三六、一七一	七五四、三八〇	五〇一、〇四八	三〇七、五八三
香港	一六、〇一〇	二三四、七〇九	二八四、三四四	—	一、五八四	一六三
英領印度	二、五八三	一〇、五九五	四〇、九一八	五三、四六四	—	—
英領海峽殖民地	七三、五七八	一七三、四五五	二〇三、一八〇	三七三、〇〇四	一九七、〇六六	二九二、四〇八
蘭領印度	三〇、五七九	五六、三三三	一一六、三〇四	—	六	六、四一八
佛領印度支那	一、六四六	七、六〇八	二三、八四二	—	—	—
露領亞細亞	二七六、八九二	五一一、二五六	六四九、一六三	九一	一、六三三	一、八七四
比律賓諸島	八一、四三五	二九一、四六〇	九一、九九九	七、二四五	七	九
暹羅	四、二七二	九九、〇三三	八七〇、三五七	六	二	—
英吉利	二四、八三九、七二三	一〇、八九八、〇五三	二四、〇七二、九〇三	八、七四五	一三、九七五	一八五、八五三
佛蘭西	一、〇二七、一五〇	九七八、六五〇	七八四、三九六	一八二	二五一	六六三
獨逸	四四四、〇九八	四九九、一四三	七四七、七五四	一四七	三、〇五五	七三九
露西亞	—	—	—	—	—	—
白耳義	一、〇六五、一二七	一、四三三、〇一七	九〇二、四八七	三	—	七
伊太利	—	—	—	—	—	二
和蘭	六一四、五五七	七〇七、九四九	四七五、七二三	—	五七九	四〇一
西班牙	—	—	—	—	—	八五、九六八
丁抹	六〇、〇三八	一四四、六〇六	三、三三三	一三	六三一	三八八
希臘	三三〇、三三六	四〇、六六六	五五、三八三	一〇	—	—
北米合衆國	一七一、八二八	一、〇四七、九二四	七二八、五七四	八〇二、三三三	五九八、四〇七	四一〇、二一三
加奈陀	四、四六八	三三、六三八	—	一、〇五〇、九八一	五五六	二、九四五
埃及	三三九、七六〇	一八八、八七三	九九、六三八	五六八、三六五	一三、一八三	九六、四八六
濠太剌利	一、二七二、一五八	一、二八五、〇〇三	二一五、八七三	七九、八三七	一一九、九二七	二、四四四
其他諸國	一、五三〇、九〇七	一、三七一、五〇一	六三〇、〇八二	七三六、〇五九	六七四、九七六	八二六、五七七
計	三六、七七三、六七四	三三、一三六、四一三	三四、四三五、八四二	四、七〇七、七二〇	一、九七五、六二九	一、五三二、五九七

六、對內取引の概要

今次事變勃發と共に、本道鑛工業の劃期的發展に伴れ、內國貨物集散價額は著しき增加を來たし

當市に於ては十億一千餘万圓の巨額に達するの盛況にして、此の內海運に依るもの六億餘万圓を占め、之を更に輸出入別に比較すれば、移出高二億五千餘万圓に對し、輸入高三億四千九百餘万圓に上る狀態である。

本市に於ける商圏は、地理的關係上前後兩圏地帶に劃然と區分し得る、即ち東北、本州、朝鮮、台灣等の前圏地帶は主として、工農產物を供給し、水產物の需要地であり、本道樺太は後圏地帶にして、前者の反對に工產物の需要地で、水產物其の他の供給地である。

更に之等の關係を地方別に見れば、本道各地には當市より金屬製品、其の他の工產物、砂糖、酒其の他の食料品、吳服太物類等の移出多く、昆布、鹽乾魚類、罐詰等が移入せられ、樺太に對しては魚網、金屬製品、內地米、セメント、和酒 織物類、食鹽、麻繩、其の他の移出を見、乾魚魚粕、鹽魚、昆布、罐詰、木材類の移入が主要なるものである。

青森を中心とする東北地方には移出品は、各種水產物の外セメント、煉乳、木炭、蔬菜、金屬品等で移入品は內地米、木材、タバコ、綿織物、機械類、味噌醬油等である。

又秋田、山形、新潟地方は魚粕、セメント、其他水產物の移出多く當市の移入は米、酒、藥製品其の他であり之等の取引關係は年々隆盛に向ひつゝあるのである。

向東京、横濱及京阪地方は鹽乾魚、罐詰、魚油、煉乳、其の他各種水產物の大顧客で當市は各種金屬製品、諸織物類、酒、其の他諸雜貨の移入は年々莫大なものである。

又山陽九州地方は、同じく魚粕其の他水產品の需要地であり、本市としては、麻繩、果物、漁網砂糖、食鹽等の移入が殊に多い。

次に朝鮮台灣には鹽乾魚類の移出少なからず、朝鮮よりの豆粕、豆、高粱其の他の雜穀、台灣よりのパインアップル罐詰、バナ、其の他の果實の移入は例年の特徵である。

而して之等の、主要取引關係は、本市港灣設備の完備、航路の擴張、又は海上巡回見本市其の他の宣傳等と相俟つて、逐年密接なる關係に向ひつゝあり、函館商品殊に水產品の活躍は、今や全國的に期待せられつゝあることは、彌々當市を水產都市として將又商工業都市としての、經濟價値を彌が上にも高調せしめつゝあるのである。

函館港對內移出入貨物價額

昭和十二年（商工會議所）調　單位千圓

種別	移出 道內	移出 樺太	移出 各府縣	移出 台灣	移出 朝鮮	移出 計	移入 道內	移入 樺太	移入 各府縣	移入 台灣	移入 朝鮮	移入 計
水產品	五二六	六五	八三、五八六	二、〇二九	一、五五八	八七、七六四	三八、〇二六	二、〇九一	五、〇二七	三	二	四五、一六九
工業品	二三、七〇〇	二、三一二	五六、五〇八	四六三	四二八	八三、四一二	七、九八六	八四九	一六五、五三六	二、九〇七	二八五	一七七、五五三
農產品	一、九七八	八六	一〇、三七四	一八	二七	一二、三八三	一八四	七	二二、三四二	二〇	一、九五六	二四、五〇九
林產品	一、五〇三	一二	四、九四五	一〇	—	六、四六九	七三六	三一	四、〇五九	二	一	五、〇〇九
畜產品	三〇	—	一三、三三〇	—	一	一三、三六一	二一	一三	一、九三四	—	一	一、九六九
鑛產品	二、一九三	一四八	四、三七六	二	三三	六、七三二	二五〇	—	六、八七二	—	七	七、一二九
雜品	七六九	五三	四一、〇四三	—	一八	四一、八八三	四一三	七	八八、二一四	—	三	八八、六三七
計	三〇、六九九	二、六七六	二一三、九六二	二、五二二	二、〇六五	二五〇、八九四	四七、六一七	三、一八八	二九三、九八四	二、九三二	二、二五五	三四九、九七五

備考　道內鐵道便ヲ除ク

鐵道貨物集散價額　昭和十二年（商工會議所）調單位千圓

種別	水產品	工產品	農產品	林產品	畜產品	鑛產品	雜品	計
移出	五、八三一	一二三、六八四	一五、六七七	二、九〇三	一、九〇三	四、二四三	八六、八二六	二四〇、〇六七
移入	四五、〇三二	四八、九九四	一三、六五八	七、九二八	一二、五六三	七、八九六	三八、八〇六	一七四、八七七
計	五〇、八六三	一七一、六七八	二九、三三五	一〇、八三一	一四、四六六	一二、一三九	一二五、六三二	四一四、九四四

備考　連絡船便ヲ除ク

第五章　運輸

一、海運の概要

我が邦に於ける海運史を繙かんとせば、我が函館港を看過する事が出來ない、古きは措き明治九年九月時の政府は、三菱會社をして國內の運航を統一し、之が主要港間の補助航路を開始するや北方にありては僅かに東京函館間の一線を劃するに至つたのみである、降りて明治十四年十一月時の品川農商務大輔は、三菱會社の獨占專横振りなる海運事業を抑壓せんが爲め、當時函館港を根據とせる北海道運輸會社及東京風帆船並越中風帆船の三會社を合併せしめて、共同運輸會社を創立せしめ、明治十五年七月政府の設立許可と共に運航に從事せしめたるも、依然として函館港は北方の重鎭であつたのである、明治十八年十月一日三菱共同運輸兩社合併して、日本郵船會社の設立後に至りても、函館港は眞に樞要航海線の中心であつた。

爾來函館の港勢は隆々として榮へ、對內航路にあれ、對外航路にあれ、其の出入船は年と共に頻繁を加へつゝあるのである。

昭和十一年內務省土木局港灣課編纂に係る、港灣統計に據れば、函館港は入港隻數に於て帝國內第八位噸數にありては第九位を占め、帝國內眞に重要港灣都市たるの實力を示してゐる。

函館港船舶出入表

年次	內外航路別	入港 汽船 隻數	入港 汽船 噸數	入港 補助帆船及帆船 隻數	入港 補助帆船及帆船 噸數	入港 計 隻數	入港 計 噸數	出港 汽船 隻數	出港 汽船 噸數	出港 補助帆船及帆船 隻數	出港 補助帆船及帆船 噸數	出港 計 隻數	出港 計 噸數
昭和十二年	內	八、一一〇	五、一三八、五九〇	三一、八九六	三〇八、二二五	四〇、〇〇六	五、四四六、八〇五	八、一一六	五、〇九七、八〇九	三一、九五一	三〇九、七五九	四〇、〇六七	五、四〇七、五六八
	外	二五七	六九五、六〇五	一	三四二	二五八	六九五、九四七	二七〇	六八二、七八五	二	一五四	二七二	六八二、九三九
	計	八、三六七	五、八三四、一九五	三一、八九七	三〇八、五五七	四〇、二六四	六、一四二、七五二	八、三八六	五、七八〇、五九四	三一、九五三	三〇九、九一三	四〇、三三九	六、〇九〇、五〇七
昭和十一年	內	七、七四五	五、一五八、八五八	三一、九八〇	二七四、六四八	三九、七二五	五、四三三、五〇六	七、七六二	五、一九六、四五一	三一、九八五	二七五、二一一	三九、七四七	五、四七一、六六二
	外	二六〇	六八九、二六一	二	六八四	二六二	六八九、九四五	二五二	六五九、一六五	一	三四二	二五三	六五九、五〇七
	計	八、〇〇五	五、八四八、一一九	三一、九八二	二七五、三三二	三九、九八七	六、一二三、四五一	八、〇一四	五、八五五、六一六	三一、九八六	二七五、五五三	四〇、〇〇〇	六、一三一、一六九

昭和十年 内	昭和十年 外	昭和十年 計	昭和九年 内	昭和九年 外	昭和九年 計
七、九〇三	二六八	八、一七二	七、九六六	二五五	八、二二一
四、八四三、七二七	六四八、九三六	五、四九二、六六三	四、八四五、五五四	六〇三、四二九	五、四四八、九八三
三二、二八二	四	三二、二八六	四一、六二三	二	四一、六二五
二六七、八一六	一、〇三六	二六八、八五二	三四九、九三八	六八四	三五〇、六二二
四〇、一八五	二七二	四〇、四五七	四九、五八九	二五七	四九、八四六
五、一一一、五四三	六四九、九七二	五、七六一、五一五	五、一九五、四九二	六〇四、一一三	五、七九九、六〇五
七、九三二	二五三	八、一八五	七、九六〇	二六〇	八、二二〇
四、八七三、九〇四	六一六、五二六	五、四九〇、四三〇	四、八六一、七二四	五九四、〇二五	五、四五五、七三九
三三、二八五	二	三三、二八七	四一、六〇二	三	四一、六〇五
二六八、〇四七	六八四	二六八、七三一	三四九、五九五	七六三	三五〇、三六二
四〇、二一七	二五五	四〇、四七二	四九、五六二	二六三	四九、八二五
五、一四一、九五三	六一七、二一〇	五、七五九、一六一	五、二一一、三〇九	五九四、七九三	五、八〇六、一〇二

二、函青連絡船

日本海運史上否東洋海運史上に、一新紀元を劃したるものは、函青連絡船の善美と貨車航送の實現とであります。

鐵道省が自慢の施設として誇る本航送は、大正十四年八月開始せられ、對岸青森港と共に同時に二隻の繋船岸壁を設備し、運送船舶は純貨車渡船二隻と、貨客渡船四隻である。

かくて此の航送開始の直接利益としては、輸送日時の短縮、荷傷み、濡損、品違ひ、品不足等の事故を防止し、海上保險料の低下、荷造費の低減等を擧げ得るが就中輸送日時の短縮は、輸送方法の改善と共に、迅速運送を尊ぶ我が海産市場としては、之が爲め一大躍進の機會を作り販路擴張上に裨益せる所蓋し多大である。

然し乍ら近時本道鑛工業の活潑なる進展に伴ひ、本州との貨客輸送頓に頻繁となり、之に對應するが爲め近く優秀船を加へて運航回數の增加と輸送のスピード化も實現せんとしてゐることは、獨り本市のみならず本道開發上眞に喜びに堪へぬ所である。

三、鐵道網

函館は、本邦縱斷鐵道の幹線をなす、函館本線の基點をなし、本道各主要都市は皆之に依つて連絡せられてゐる、元來交通系統の變更は、その地方の產業上にも將又貿易上にも一大變革を齎すことは謂ふ迄もない、曩に長輪線開通は本道奥地並樺太との連絡距離を短縮し剩へ地勢平担にして積雪の少きことは輸送能力を著しく增大したのである、啻に斯くあるのみならず函館と炭田地方を接近せしめ噸當炭價五、六十錢の低下を見たるの外、沿線各町村との商取引を密接ならしめたのである。

本市培養線とも謂ふべき瀬棚線は、其の終点瀬棚港に全通し、又五稜郭より分岐する木古内線は江差線と改稱せられ既に江差町迄全通を見、更に木古内、福山線も既に一部開通し、函館戸井線と共に近く全通せんとしてゐるのである。

函館釜谷線或は私線たる森砂原線尙延長して渡島海岸鐵道の全通を見るに至らば、本市の發展に亦一段の光彩を加へるものである。

四、道路網

本市が道南半島の盟主たるを期するるは、前述の如き鐵道網と並んで、道路を完備すること亦急務であらねばならぬ。
市道は近年都市計畫の確立と共に漸次改良せられ、主要道路は大火災後殆んど舗裝を了へ之を數年前に比するときは實に隔世の感があるのである。
道路延長を見るに、市道に於て十二萬九千米餘を占め、國道五千米、準地方費道二千七百米、地方費道は最も少く約五十米で此の總延長十三萬米餘に上り此の外私道多く四通八達せるも未だ近代都市たる舗裝を完ふするには數年を要するものである、殊に本市經濟後方地帶との連絡道路に至りては甚だ遼遠と謂はねばならぬ。
即ち本市より隣接諸邑に通ずる主要道路は僅かに左の六線を數ふるのみで、而も工事中に屬するものあるも多くは晩春及盛夏の交辛ふじて自動車の運轉を見るのみである。

一、國道第四號線	仲濱町ヨリ万年橋終点、大野村江差、札幌ヲ經テ旭川ニ至ル	國道
二、函館江差線	万年橋終点ヨリ上磯町經由江差ニ至ル	準地方費道
三、函館福山線	万年橋終点ヨリ上磯ヲ經テ海岸に沿ヒテ福山ニ至ル	同
四、函館大野線	北濱町大野間同	同
五、函館龜田線	万年橋終点ヨリ師範學校ヲ經テ赤川村役場ニ至ル	同
六、函館椴法華線	函館驛ヨリ電車線ニ沿ヒテ湯川村ニ至リ海岸ヲ廻リテ椴法華ニ至ル	同

本市叙述の趣旨に鑑み、昭和五年以來年々本市主催道南産業振興協議會を本市に開催し、各町村及關係官公署首腦者會合して種々協議を重ぬるも、其の都度都市聯絡産業道路の完成は其の重要なる題目なるは宜なる哉である。

第六章　金融其の他

一、金融

本市が商工都市として逐年隆盛に赴きつゝあるは、産業資金の潤澤なりしも亦其源由であります
本市金融界の系統を見るに、資金の供給機關としては勿論銀行であるが、又中産階級以下の庶民機關としては、信用組合、無盡會社、質屋（公益質屋を含む）等であります。
飜つて本市金融運轉の狀況を概說すれば、漁業資金は其の基本でこれ亦水産都市たる特色が現はれてゐる。
而して例年北洋漁業の仕込及出漁時期と之等漁獲物の集散並農産物出廻り時期とは、繁劇を呈するのが常例であります。
以下月別に大要を示せば次の如くである。

一月二月　米及近海鰮粕の入荷と雜穀竝鰑の輸出等に依り資金の需要を促し、又前年の貸付金の回收時期に當り大体に於て平調である。
三月四月　本道及樺太への漁業仕込時期になると、工船出漁の爲め、漁網漁具繩莚、食料品の荷

動き增加も手形割引相當に行はれ、鰮粕の入荷と豆類の內地移出に依り金融界は好況を呈す。

五月六月　樺太の鰊出廻時期と露領の出漁準備時節で一面、身欠鰊、鰮粕及雜粕の出廻期のため頓に貸出增加する。

七月八月　露領方面の仲積物資の移動あるも夏枯れ一時少康を保つ。

九月以降　露領漁業を初め各漁場の切揚時期たると共に漁獲物の集散時期である。倘期節向の吳服類の入荷、雜穀、米、澱粉等の移出入に伴れ金融界の繁忙は最高調に達する。

組合銀行

（イ）銀行

本市の銀行は本店一行、支店十一行を數へ左表の通りである。

種別	本店	支店	計
普通銀行 貯蓄銀行	一〇	一七	二七

同預金（單位千圓）

年次	定期	當座	特別當座及貯金	通知	諸預金	計
昭和十二年	五九、二九〇	四七五、三三五	四五、〇七八	一五、二〇三	七六、七一四	六七一、六一九
昭和十一年	五二、二九八	三八九、一五一	四一、一五八	一三、八八八	八〇、二〇三	五七六、六九八
昭和十年	五五、九八三	三五六、一二五	四四、二三〇	一二、七六七	七五、四五四	五四四、六三九
昭和九年	五三、七五三	三四八、九三九	五五、七三五	一五、二六三	七八、九一二	五五二、五九一
昭和八年	四二、〇四六	二五八、五七六	四八、四一〇	一〇、三三三	四九、〇一四	四〇八、三五九

同貸付金勘定（單位千圓）

年次	證書貸付	手形貸付	當座預金貸越	荷付爲替貸付	當所割引手形	他所割引手形	計
昭和十二年	九四二	一四三、四七三	八七、一九〇	三四、六八一	九三、六三一	一六、四五三	三七六、三六八
昭和十一年	六〇六	一一三、一三七	七五、〇八一	三一、六四六	七〇、五六八	一六、一九三	三〇七、二三〇
昭和十年	一、二二五	一〇七、〇三二	六四、六〇四	三〇、〇〇六	七五、八四九	一一、八六三	二九〇、五六八
昭和九年	一、八三六	六二、五七四	五五、一五八	三三、〇八八	四七、五七六	八、七〇一	二〇七、九三三
昭和八年	一、四一五	五五、六五五	四五、八六六	二七、三九八	三七、四九九	五、〇三九	一七二、八七三

同爲替手形取扱高（單位千圓）

年次	爲替手形		荷爲替手形		割引手形		送金取立手形		計	
	取組高	仕拂高	取組高	仕拂高	取組高	仕拂高	取組高	仕拂高	取組高	仕拂高

昭和十二年	一四〇、六二五	一二四、五三五	三四、六三三	三三、六三八	三三、七八三	三三、四二九	一九、三〇一	三三、六八七	二一八、三三三	一九四、二八九
昭和十一年	一三三、五三一	九九、四三三	三三、九四八	一九、七七三	三〇、八三三	三七、三四七	一六、三〇一	三〇、三八一	一九二、五〇二	一六六、八三四
昭和十年	一二四、五七三	八九、八七〇	二八、八一八	一九、五八三	一七、五三四	三三、八一五	一三、三五四	一九、一五七	一七三、二七九	一五一、四二五
昭和九年	一一〇、〇九二	一二四、二九四	二九、三三三	一九、三〇二	一四、五九七	三三、一九八	一〇、三六七	一八、三六六	一六四、二七八	一七四、一五九
昭和八年	八六、九八八	七五、三五六	二六、六四三	一三、七〇三	一〇、〇八〇	一六、八三七	一一、三四四	一一、五一〇	一三四、九五五	一一七、三〇六

同手形交換高（單位千圓）

年次	枚數	金額
昭和十二年	三九八、二四七	二八八、五八三
昭和十一年	三七九、九一九	二四五、六八三
昭和十年	三六三、六九八	二一三、六八〇
昭和九年	三五八、三二一	二〇四、七七七
昭和八年	三四七、六九五	一四九、九六九

組合銀行漁業資金調（月末殘高）（單位千圓）

年次＼月別	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月
昭和十二年	五、八四九	七、三五九	八、三五七	一一、三二九	一七、九一九	三三、〇〇九	三四、八八四	三六、六一〇	三四、四一六	一七、三六九	一一、三六八	八、七三五
昭和十一年	四、一九二	二、三四二	五、八二一	九、一一四	一三、三三六	一六、六四四	一七、四一七	一六、〇三一	六、七七五	六、二八六	五、四六五	五、三九八
昭和十年	二、九七六	三、四二四	四、五三八	七、一四一	一一、六五〇	二〇、三三四	二三、九五六	一六、五〇三	九、一二〇	五、五七三	四、四九〇	三、七八五
昭和九年	二、四八一	二、七一〇	三、七九三	四、三五四	六、七三二	八、三四六	八、四三五	七、七八八	七、五三三	四、六七四	三、三九三	二、九八四
昭和八年	二、二九一	二、三四八	二、四七三	三、〇四五	四、一〇七	五、六六三	六、〇九四	三、五五三	三、七三三	二、六一三	二、五六五	二、四〇三

組合銀行商品担保貸出各年平均殘高（單位千圓）

年次＼種別	商品 海産物	商品 農物物	商品 其他	商品 計	有價證券	債權證書	不動産	保證及信用	合計
昭和十二年	四三、三二〇	五、七七一	三、〇九三	五三、〇七三	六〇、一一二	七二、三〇四	一六八、一一五	三四三、六五六	六九四、一五九
昭和十一年	四三、八六三	三、一七七	二、一六五	四八、三〇五	五三、四八八	七三、〇三一	一七〇、一二七	三五三、六四八	五九五、四八九
昭和十年	四三、一九九	四、七六三	七七	四七、〇三九	一三三、〇九〇	—	一七一、一五四	—	三四〇、二八三
昭和九年	三六、九七三	二、四六六	一、五一四	四〇、九〇三	八〇、五三九	—	一七五、三三六	—	二九六、七〇七
昭和八年	二八、六七一	一、七三一	一、三四四	三一、七三六	六八、一〇〇	—	一八三、三三〇	—	二八三、〇六六

日本銀行函館支店預金

年次	受入高	拂出高	殘高
昭和十二年	二四二、五〇七、〇〇〇圓	二四一、七一七、三〇〇圓	九九一、〇〇〇圓
昭和十一年	二一八、九二〇、〇〇〇	二一九、一一六、〇〇〇	二五七、〇〇〇
昭和十年	一九八、九六八、九二六	一九五、四六一、四〇八	四四六、二六九
昭和九年	二〇一、六一一、二七九	二〇一、五三五、八四二	一、〇二三、四九一

日本銀行函館支店國債

年次	國債元利支拂高	國債募集取扱高
昭和十二年	五七三、〇〇〇圓	—圓
昭和十一年	七四二、〇〇〇	二、九三九、〇〇〇
昭和十年	二、九一六、四七三	—
昭和九年	四八五、二九五	—
昭和八年	三三一、五七五	—

日本銀行函館支店貸付金及割引手形

年次	當座貸越高	手形割引高
昭和十二年	二八三、〇〇〇圓	—圓
昭和十一年	一九八、〇〇〇	一一〇、〇〇〇
昭和十年	二八一、一七三	八〇、〇〇〇
昭和九年	五七八、二八九	一一〇、〇〇〇
昭和八年	三四九、二三〇	一九〇、〇〇〇

日本銀行函館支店送金爲替取扱高

年次	府縣仕向高	同被仕向高	本道仕向高	同被仕向高
昭和十二年	四五、三一九、〇〇〇圓	五七、〇九三、〇〇〇圓	一二、二〇〇、〇〇〇圓	一二、一三〇、〇〇〇圓
昭和十一年	四二、八三二、〇〇〇	四八、七八八、〇〇〇	一〇、六五〇、〇〇〇	一〇、六一〇、〇〇〇
昭和十年	四〇、二九四、二二八	四五、三八八、八一七	九、九一〇、〇八五	八、四七〇、二七六
昭和九年	四二、五三三、五五三	五三、八七九、五六五	五、三八〇、〇〇〇	一〇、三二〇、二八四
昭和八年	二七、八五一、四八九	二八、八三一、四〇四	三、五六〇、〇〇〇	八、七〇五、四四七

(ロ) 無盡會社

當市に於ける無盡會社は、函館無盡株式會社及拓殖無盡株式會社函館支店の二社である。左に最近五ヶ年に於ける情勢を掲ぐれば左表の通りである。

無盡(株式會社 一 / 株式會社支店 一)

同資本金四〇〇、〇〇〇圓　拂込額二四七、五〇〇圓　積立金一七〇、八九八圓

同加入盟人員

昭和十二年	昭和十一年	昭和十年	昭和九年	昭和八年
一七、七五八人	一七、一一三人	一六、一一三人	一四、五四〇人	一二、五七〇人

同給付契約高

年次	給付濟高 口數	給付濟高 金額	給付未濟高 口數	給付未濟高 金額
昭和十二年	六、〇六六口	五、一一三、五〇〇圓	一一、六七三口	九、五三八、八〇〇圓
昭和十一年	六、二九〇	四、五八六、六〇〇	一一、二五三	八、六七三、七〇〇
昭和十年	六、三八五	五、三六二、一〇〇	九、一六〇	七、一四七、〇〇〇
昭和九年	五、七八二	五、三六〇、三〇〇	七、八五五	五、九七二、三〇〇
昭和八年	四、七五二	四、八七七、五〇〇	七、八一八	六、一二六、五〇〇

同掛金契約高

種別	昭和十二年	昭和十一年	昭和十年	昭和九年	昭和八年
受入濟高	七、三〇一、九四七圓	六、八七一、三八〇圓	六、五四〇、四九八圓	六、六三〇、四七三圓	六、八〇〇、三五三圓
受入未濟高	七、九三三、〇一三	六、七二三、一〇八	五、八三三、三一八	五、四八二、八八二	四、四四六、七二一

同種類

年次	五千圓組	參千圓組	貳千圓組	壹千圓組	五百圓組	參百圓組	貳百圓組	計

昭和十二年	一二	二五	五六	一七一	三六九	八一	—	七一四
昭和十一年	一一	二一	四八	二〇七	四二二	一一七	—	八二六
昭和十年	一〇	一九	四五	二三四	四七五	九〇	—	八七三
昭和九年	九	一九	三九	一四八	二七五	五五	—	五四五
昭和八年	九	一九	三五	一五〇	二七四	二七	—	五一四

（八）信用組合

本市に於ける信用組合は有限責任函館信用組合で昨年中に於ける状況は左の如くである。

信用組合

組合別	組合數	組合員數	出資額 總額	出資額 拂込濟額	準備金及積立金	借入金	貯金	貸付金	預金	有價證券	現金
信用組合	一	二、八五〇	六六六、六三〇圓	五九〇、六八〇圓	六五、九二七圓	三八二、五五四圓	七五一、五七五圓	一、三五八、七五六圓	二九四、二六一圓	一一三、一三九圓	二、九六七圓

二、産業團体

名稱	所在地	名稱	所在地

名稱	所在地
（產業組合）	
有限責任函館信用組合	西川町
（同業組合）	
函館海產商同業組合	船場町
函館米穀商同業組合	辨天町
函館雜穀商同業組合	末廣町
函館木炭同業組合	若松町
（水產會及水產組合）	
函館市水產會	市役所內
北千島水產會	富岡町
擇捉島水產會函館出張所	辨天町
函館北部海產物製造水產組合	吉川町
北海道機船底曳網漁業水產組合函館支部	鰪澗町

名稱	所在地
（漁業組合）	
無限責任函館山背泊漁業協同組合	山背泊町
無限責任函館住吉町漁業協同組合	住吉町
無限責任函館大森町漁協同業組合	大森町
無限責任函館海有漁業協同組合	淺野町
（酒造組合）	
函館酒造組合	本町
（工業組合）	
北海道鑵詰工業組合	松川町
函館ゴム工業組合	
函館建具工業組合	旭町
函館印刷工業組合	東雲町
函館鐵工機械工業組合	眞砂町

名稱	所在地
函館紙器工業組合	寶町
函館家具工業組合	音羽町
函館竹籠工業組合	東濱町
函館フイツシユミール工業組合	船場町
函館鐵製品工業組合	寶町
函館木造船工業組合	音羽町
北海道漁網工業組合	末廣町
函館柔魚釣針工業組合	鶴岡町
函館地方馬具工業組合	若松町
函館地方靴工業組合	寶町
（商業組合）	
函館米穀卸賣商業組合	辨天町
函館米穀小賣商業組合	末廣町

名稱	所在地
函館魚肥移出商業組合	東濱町
函館氷卸賣商業組合	本町
函館豆腐蒟蒻商業組合	大黑町
函館海產物移出商業組合	豐川町
函館燃料小賣商業組合	大黑町
函館旅館商業組合	音羽町
函館毛皮商業組合	大町
函館精肉卸小賣商業組合	蓬萊町
函館麵類飲食商業組合	若松町
函館昆布加工品卸賣商業組合	堀川町
函館電氣ラヂオ商業組合	鶴岡町
函館時計貴金屬商業組合	末廣町
函館古容器商業組合	旭町

函館綿類小賣商業組合	追分町
函館洋服商業組合	東川町
函館蓄音器小賣商業組合	恵比須町
函館木材商業組合	若松町
函館菓子商業組合	鶴岡町
函館ゴム製品商業組合	鶴岡町
函館クリーニング商業組合	大町
函館荷馬車運輸商業組合	海岸町
函館市大黒町通商業組合	大黒町
函館市第一區復興商業組合	市役所內
函館市第二區復興商業組合	同
函館市第三區復興商業組合	同
函館市第四區復興商業組合	同
函館市第五區復興商業組合	同
函館市第六區復興商業組合	同
函館市第七區復興商業組合	同
(準則組合)	
函館鐵物商組合	地藏町
函館銅板鉄板商工組合	恵比須町
函館洋服業組合	本町
函館菓子商組合	鶴岡町
函館土木建築請負業組合	鶴岡町
函館大工職組合	舟見町
函館石工同盟會	相生町
函館疊商組合	大黒町
函館染物業組合	大黒町

函館醤油味噌製造組合	榮町
函館魚商組合	豊川町
函館養魚組合	海岸町
高盛水産加工組合	宇賀浦町
函館西部水産加工組合	小舟町
函館土木建築材料運搬組合	高盛町
函館造船木工職組合	鶴岡町
函館葬具業組合	末廣町
函館運送勞力請負業組合	大町
函館荷馬車組合	大町
函館和洋小間物商組合	地藏町
函館倉庫業組合	豊川町
函館造船業組合	西濱町
函館土木勞力供給組合	音羽町
(其他團体)	
函館商工會議所	鶴岡町
函館商工組合聯合會	鶴岡町
函館發明協會	會議所內
函館觀光協會	市役所內
函館市物産協會	市役所內
函館工藝協會	市役所內
函館燒竹輪蒲鉾製造組合	大森町
函館競馬倶樂部	市外柏野
函館廣告研究會	地藏町
木材工藝學會函館支部	函館工業學校內

三、中小商業指導助長施設

今本市が實施せる主なる施設を述ぶれば左の通りである。

商業組合結成

近時中小商工業は一般經濟界不況に災せられ、然も百貨店進出産業組合保護活動等に壓せられ、不振勝なるを以て、努めて商業組合及工業組合の結成を促し、共同事業及販賣統制を計り併せて産業事業資金として低利資金の融通を均霑せしめて、斯業の健實なる發展を期しつゝありたるが日支事變の勃發準戰時經濟より戰時經濟の移行となりて諸物資配給の統制となつたが、之等國策は商工業組合を通じて實施せられ、市内に於ても右方針により新設せられたものである。

商業組合

組合名	所在地	組合名	所在地
函館米穀小賣商業組合	末廣町九八	函館海産物移出商業組合	船場町二二
函館魚肥移出商業組合	船場町二一	函館燃料小賣商業組合	高砂町六二
函館氷卸賣商業組合	本町九六	函館旅館商業組合	堀川町一八六
函館豆腐蒟蒻商業組合	東濱町四二	函館毛皮商業組合	大町一八
函館精肉小賣商業組合	蓬來町一九	函館菓子商業組合	相生町一〇一
函館麵類飲食商業組合	若松町七一	函館護謨製品商業組合	鶴岡町五〇
函館昆布加工品卸賣商業組合	砂山町九九	函館市第一區復興商業組合	谷地頭町八七
函館電氣ラヂオ商業組合	鶴岡町六二	函館市第二區復興商業組合	末廣町六六
函館時計貴金屬商業組合	末廣町三二	函館市第三區復興商業組合	惠比須町三六
函館古容器商業組合	旭町一〇〇	函館市第四區復興商業組合	大森町一五
函館綿類小賣商業組合	追分町三六	函館市第五區復興商業組合	松風町三二
函館洋服商業組合	末廣町六五	函館市第六區復興商業組合	新川町二〇
函館蓄音器商業組合	地藏町六二	函館市第七區復興商業組合	宇賀浦町三
函館木材商業組合	若松町一五		

海上巡回展覽會の開催

本市は、經濟的關係の密接なる地方と提携し、共存共榮を圖るため新しき試みとして海上巡回展覽會を企圖し、昭和五年以來回を重ぬること五回にして、相當の實績を收め、就中昭和七年一月

には遠く南洋方面に巡航し、續いて七月北鮮及北滿に進出し、更に昨年七月には南鮮及南滿洲に一大飛躍をなし、經濟的提携に販路の擴張に資する所が多大であつたのである、其方法として優秀船を傭船し、滿船飾を施し展覽會式に本市生產品を汎く出陳し、尙本市竝に附近紹介のため市街パノラマ、大工場及大會社等の實景、名所舊跡の紹介圖其の他統計圖表を展示したのである、同時に市長又は助役を團長とする市有力者、新聞記者、當業者等を以て組織せる視察團を乘船せしめ、寄港地一帶の經濟事情を視察せしめ、尙彼地の有力者と親しく意見の交換をなす機會を與へ彼我の關係を益々密接ならしめたのである。今その大要を示せば次の如くである。

昭和五年

開催期　七月
巡航地　北海道瀨棚、熊石、江差、福山の各町村
使用船　近海郵船株式會社　大隅丸
參加店　二三店
觀覽人員　一四、〇〇〇名
賣上高　七、七〇〇圓
視察團員　一〇一名

昭和六年

開催期　七月
巡航地　青森縣下風呂、大畑、岩手縣宮古、釜石、大船渡、宮城縣石巻、鹽釜
使用船　日魯漁業株式會社、信濃丸　六、一四六噸
參加店　三〇店
觀覽人員　一一五、〇〇〇名
賣上高　三〇、〇〇〇圓
視察團員　二〇三名

昭和七年

主催　函館市役所及北海道廳
開催期　一月ヨリ三月迄　（四十八日間）
巡航地　門司、鹿兒島、基隆、香港、マニラ、イロイロ、セブ、ダバオ、サンフアーナンド　（マニラ以下比律賓諸島）
使用船　中村組所有船　第三雲海丸　四、五三〇噸
携行見本品　本道主要海產品、罐詰、肉製品、農產品、林產品
視察團員　當市ヨリ四〇名

昭和七年

開催期　七、八月　（十五日間）
巡航地　船川、新潟、七尾、朝鮮元山、城津、淸津、雄基
使用船　中村組所有船　第三雲洋丸　三、〇〇〇噸
參加店　二〇店

觀覽人員　四五、〇〇〇名
賣上高　一八、〇〇〇圓
視察團員　九三名

昭和八年

開催期　七、八月（二十日間）
巡航地　釜山、木浦、仁川、鎭南浦、大連
使用船　嶋谷商船株式會社所有船　大成丸　一、八〇〇噸
參加店　日魯漁業株式會社　外二七店
觀覽人員　三三、〇〇〇人
賣上高　二七、〇二五圓
視察團員　一八〇名

尙昭和九年本市大火災以來船腹拂底傭船料の高騰は海上巡回展の開催を中絶の止むなきに至りたるも道廳の應援を得左記の通り北鮮地方に見本市を開催せり。

昭和十二年

一、見本市開催地竝期日
八月二十七日　雄基
同　二十八日　羅津
同　三十日　清津

二、見本品
家具、建具、菓子、護謨製品、澱粉、海産品、海産加工品、罐詰
三、出張員　當業者　四名、本市産業課長

昭和十三年

一、見本市開催地竝期日
十月十一日　雄基（圖們ノ業者參加）
同　十三日　羅津（延吉及牡丹江ノ業者參加）
同　十五日　清津
同　十八日　城津
二、見本品
家具、建具、菓子、澱粉、雜穀、木竹製品、土産品、海産物、海産加工品、昆布竝昆布製品
三、出張員　當業者　八名　市より書記一名

展覽會の開催

市は道廳又は函館商工會議所其他商工團体と共催にて例年各種展覽會を開催し商品の改善宣傳に努めつゝあり。

講演會の開催

商店經營の合理化並に經營の改善を圖るため斯界の權威者を聘し各種講習會、講演會を開催す

座談會、懇談會の開催

金融、貿易時局對策其他諸種の重要事項に付當局並業者の參集を求め座談會、懇談會を開催す

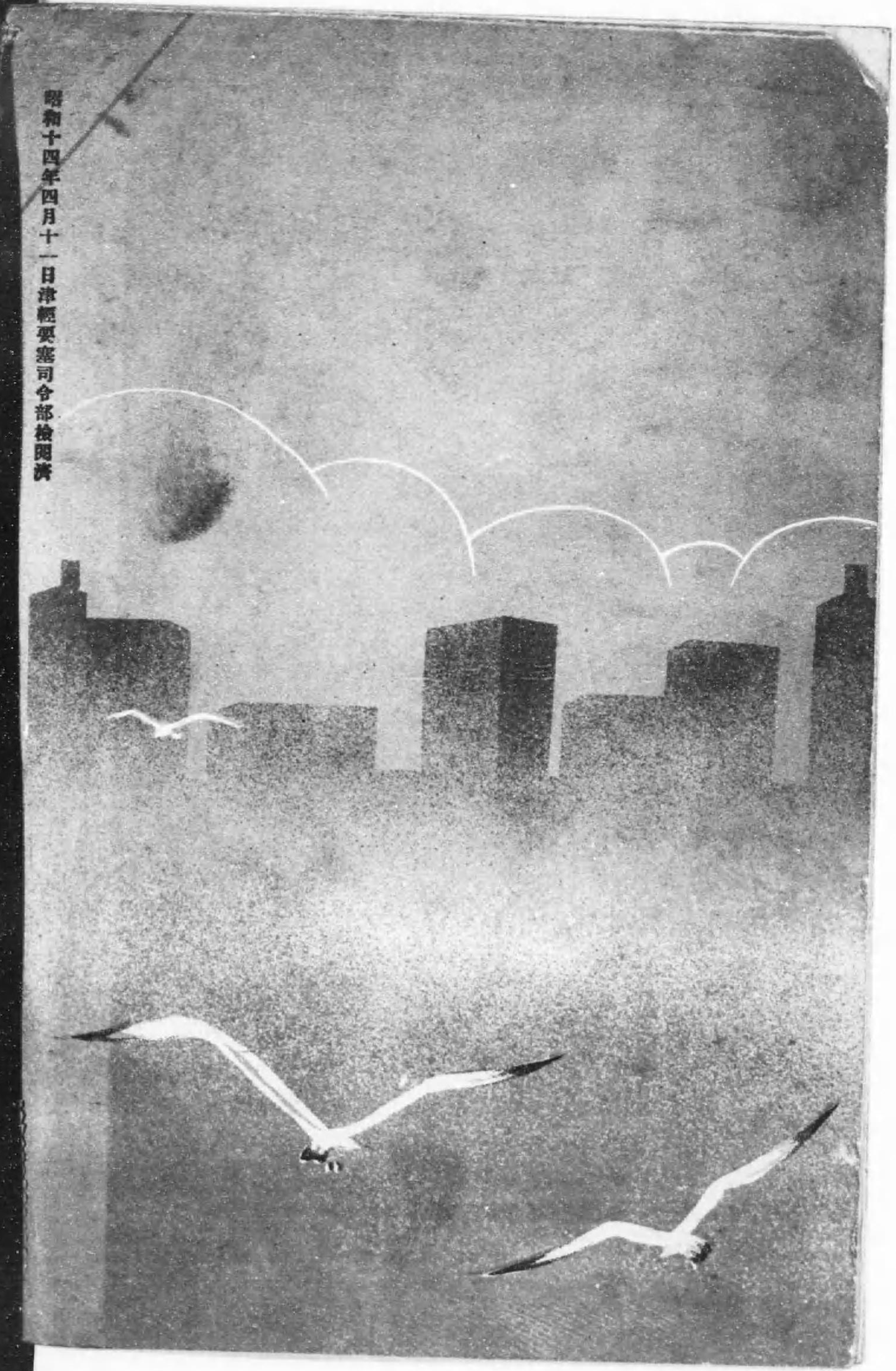
昭和十四年五月十一日印刷
昭和十四年五月十五日發行

（非賣品）

函館市西川町百九番地
發行所　函館市役所

函館市人見町六番地
發行者兼著作者　原將行

函館市音羽町一番地ノ二
印刷人　水間生太郎

函館市音羽町一番地ノ二
印刷所　至誠堂印刷所

終